
バイオレンス"Z.O.G"

dim

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオレンス”Z・O・G”

【Nコード】

N3106Y

【作者名】

dim

【あらすじ】

謎の存在Xの手により、条件絞り込みの末に選ばれた三人の男たちが送り込まれた。身分不相応な力を入れた男たちは、自分本位の願いに基づき行動を始めその猛威を世界に振るう。個人の意思によって振られる暴力に、果たして世界はどう反応するのか。バイオレンス退廃SFストーリー、ここに開幕！

第一話 暴力降臨

地球人口約60億の中から、3名の人間が超常的存在によって選抜された。

この超常的存在のことを、この場では仮に存在Xと呼称しよう。神あるいは悪魔、精霊に妖怪。呼び方は何でもいい。人知の及ばぬ未知の力行使するものを指し示すワードである。

彼・彼ら存在Xによる選抜は、実にシステムティックに行われた。

条件一、日本国籍を有した日本人である。

これによつて60億以上あつた対象は、一気に1億2千万にまで絞り込まれた。

とはいえ、これではまだ対象は多い。よつて次なる条件が与えられ、対象をさらに絞り込むことにした。

条件二、漫画、ゲームなどサブカルチャー文化に造詣のあるもの。

しかし、この条件における造詣の範囲は非常に広く設けられたため、対象の絞り込みについてはイマイチはかどらない結果となつた。選抜された対象は1億2千万から5000万前後に。たつた2分の1程度にしか及ばない絞り込みだった。

そして存在Xはさらなる一つの条件を付け加えることにより、選抜対象の最終絞り込みを行うこととした。

条件三、他者に対する暴力的な衝動を持っているもの。

かくしてようやく、選抜対象は100以下の数に収まることにな

った。

これら三つの条件に該当し選抜された者たちの中から、ランダムに3人の人間が存在Xの手によって選出され、そして物語は動き出すのであった。

見渡す限り、周りに山も草も町も何もない荒れた荒野。

そこにぼつりと存在する、鋼の巨人が一体あった。

全長は10mを優に超え、重量は軽くtを超える機械仕掛けの巨人。

その頭部の剥き出しとも言えるキャノピーから覗くコックピットには、巨人を操るパイロットである男が座して存在していた。

男は周囲の機器やキャノピーから覗く光景などを、興味深そうに見渡す。

「あの出来事は本当のことだったみたいだな。まあ、今更疑うことでもないんだろうが……なんにせよ、これなら例の件についても信じてよさそうだ」

誰に向けるでもない独り言をブツブツと呟きながら、操縦桿や計器類に手を滑らせていく。

何かを確認するような手つきで、男はコックピットの中を確認していった。

「不思議なもんだな。動かしたことなんざあるわけないんだが、何故かどうやればどう動くのか手に取るように分かる。そうでなきゃ俺が困るんだが、妙な感じだ」

実際、男が自分で言った通りの状態だった。

目の前にある計器類が、触れてるスイッチが、突き出されている操縦桿が。

それらをどうすればどうマシンが動くのか、まるで使い慣れた道具を使うかのような感覚で理解出来ていたのだ。

見知らぬものを前にして覚えるその感覚に薄ら寒いものを感じるものの、とはいえそれはなくてはならないものだった。扱い方を知らなければ、この巨大なマシンもただの鉄屑にしかならない。

それに、なんだかんだ言っただけで慣れてみれば、案外この感覚は楽しいものであった。言ってしまうえば、お手軽な全能感とも言つべきか。

「いいね……こいつはいい」

思わず口元が上がり、忍び笑いが漏れる。

実に開放的で気持ちの良い状態だった。社会から隔絶されたことに得られた自由が、男の全身に沁み渡っているようだった。

とはいえ、何時までもこれに浸っているのは些か不健全だった。

男はさてと気を取り直し、ついに目の前にある操縦桿を握りしめる。

ズウンと、今まで静かに鎮座していたマシンが胎動を始める。

そして同時に、地面が揺れたかと思つた次の瞬間。マシンの周囲の大地が盛り上がり、うぞうぞと醜悪な外見をした化け物たちが大量に現れ始めた。

そのまるで計つたかのような目の前のタイミングの出来事を、男

は暴力的な笑みを浮かべたまま見届けていた。

「なるほど。これが説明にあつたチュートリアルバトルってことか。何から何まで御膳立てしていてくれてて、実に有難いぜ。何せ、俺も早いとここいつの力を試したかったからなあ……」

クククと、笑い声を押し留めることが出来ず漏らしてしまう。
明らかに友好的でない化け物が目の前に現れているのに、男に臆した雰囲気はない。逆に高揚し、興奮した気配が台詞の端々から窺い出ている。

そしてその気配は化け物たちが男の乗るマシンへ向けて殺到する段階に至って、ついに炸裂した。

「ギャハハハハッツ！！ マジーン、ゴーだ！ い、く、ぜえええええええ！！」

男の叫びに呼応し、その搭乗する機械仕掛けの巨人 鉄の城
マシンガンの瞳に光子力の灯りが点き、迫る化け物の群れへと突っ込んでいくのであった。

2001年1月。突如とした起こつた佐渡島における異変の発生を、至近の新潟に設置された佐渡島ハイヴ警戒施設が確認した。

それは震度計と遠望からのカメラによる観察から、多数のBETAと何者かが交戦を行っているものと思われる反応だった。

基地司令は各基地へと出勤状況の照合を行い、活動してる部隊がないことを確認。それと同時に戦闘を行っているものをアンノウ

と決定、事態把握のための偵察部隊の派遣を決定する。

この司令による行動の決定から命令の伝達までに、要した時間はおおよそ37分弱。極めて速やかで円滑な判断だったと言える。

編成された部隊が搭乗した揚陸艇は可能な限り全速をもって佐渡島へと急行。沖合へと到着後、一個中隊規模の戦術機部隊を派遣し、上陸を果たす。

「各機、これより我々は異常発生地域へと向かう。目的地、及びその途中経路ではBETAとの遭遇が予想される。常に警戒を忘れないよう注意しつつ、NOEを維持しながら移動せよ」

『了解』

『無茶はしませんよ』

「忘れるな。我々の最優先目的は情報の確認だ。敵の撃破よりも自機の生存を優先させる。ここはBETAの勢力圏内だ、どこから光線級が顔を出すのか分かったものではない。常にデータリンクを意識し、僚機の位置を確認しろ」

派遣された戦術機部隊であるガネット中隊の部隊長、隅島赤鷲は部下への注意を深く行いながら、跳躍ユニットを起動させ移動する。先に自分で言ったように、敵の陣地である以上行動は拙速が尊ばれる。部下たちも馬鹿ではなく、そのことを十二分に理解しているために普段よりも口数少なく行動する。

BETAたちに食い荒らされた佐渡島の大地は、お陰さまで凹凸のなくなった広い荒野となっている。戦術機を高速で移動させることに不自由はなかった。

そして幸いなことに、懸念されていたBETAたちの襲撃はなく、ガネット中隊は一人も欠けることなく目的地付近へと到着すること

が出来た。

「ガネット1より、ガネット中隊全機へ通達。これより命令にあった異常発生地点へと到着する。目標地点付近にはBETAの存在も確認されている。データリンクで布陣を確認しろ、戦闘準備を忘れるな！」

本部からのデータリンクから伝えられる内容からは、依然変わらず戦闘らしき反応は継続中とのことだった。

最初に確認されてから経過した時間を考えると、このアンノウンはおおよそ2時間弱もの間BETAと戦い続けていることになる。

これだけでも詳細不明ながら、侮ることのできない存在だということは容易く理解できた。一体その正体はいかなるものなのか。

それを確認するのがガネット中隊の任務であった。願わくば敵対勢力でないことを隅島は祈るばかりであったが。

「出るぞ！ 各機警戒せよ！」

僅かにあつた段差の丘陵地を乗り越えて、ガネット中隊は以上の確認された現場へと飛び出した。

そしてその目に、思いもがけぬ想像外の光景を収めることになる。

「……………な、何だこれは？」

『HQよりガネット1へ。状況の報告を求める。アンノウンの確認はできたか？』

「……………こちらガネット1、アンノウンは確認した。現在も目の前でBETAと戦闘中だ。数は……………一機だ」

『何だと？ HQよりガネット1、内容が聞き取れない。もう一度報告しろ。アンノウンの正体は何だ？』

「だから一機だ！ ガネット1よりHQへ、確認できたアンノウンは一機！ 現在もなお目の前でBETAの大群相手に、単機で戦闘続行中だ！！」

そこは死屍累々とした戦場だった。

ひしゃげられ潰されたBETAの亡骸が、そこらじゅうの大地に埋め尽くすほどの数をなして放置されている。

しかもその数は現在進行形で増え続けていた。

そう、たった一体の魔神の手によって！

「あれは、何だ？ 戦術機なのか？」

隅島率いるガネット中隊が観察している目の前で、正体不明のアンノウンは湧き出るBETAを相手に戦いを続けている。

その姿はまさしく異形だった。少なくとも既存の戦術機の系統から、兵器概念からしてかけ離れていると一発で分かる外形をしていた。

その曲面を多用した装甲デザインと骨太な手足の造りは、機動性を重視した戦術機の基本発想から真つ向に喧嘩を売っている設計である。そもそも戦術機にとって機動戦闘の要である跳躍ユニットが、アンノウンには明らかに存在していなかった。すでにこの時点で現行の戦術機思想から外れたものと一般兵でも分かる。

そしてもう一つ目につく特徴が、アンノウンの頭頂部。

そこには明らかにコックピットと分かる部位が設けられていて、あまつさえパイロットの姿が外部から一目瞭然となるキャノピーで

覆われているだけという、あまりにも無防備な様を見せていたのだ。隅島はまるで狙って下さいと言っているようなものと感じられた。

観察するだけそれほど分かる、あまりのアンノウンの馬鹿馬鹿しさ。

しかしその馬鹿馬鹿しさを鼻で吹き消すように、アンノウンは圧倒的な力を見せつける。

『はは、いいぜいいぜ！ 燃えてきた！！ ドンドン来やがれよ 化け物どもよお！』

アンノウンへと向けて振られた要撃級の腕を、苦もなく受け止め、そのまま押し込んだかと思うとその両手のパワーだけで要撃級を引き裂く。

足から這い上がってきている多数の戦車級も意に介した風もなく、その手足を振り払い衝撃で潰され振り落とされるに任せたまま暴れまわっている。

わざわざ垂れ流しにされている外部スピーカーから響き渡るパイロットのものらしき興奮した口調と共に、アンノウンの猛威は止まるところを知らなかった。

『おらあ！ いけよロケットパンチ！！』

アンノウンが腕を突きだして構えるや否や、構えた腕が肘関節部分から外れ飛び出していった。

ジェット噴射炎を噴き出しながら高速で拳が飛び、あろうことがそのままBETAへと叩き付けられ、しかも貫通した。

空舞う拳はそのまま勢いを衰えず自由自在に動き回り、幾度となく進路上のBETAを貫くと、アンノウンの腕へと戻り再度ドッキングする。

『ドンドン行くぜ、次はこれだ。ミサイル発射ア!!!』

アンノウンの腹部装甲の一部が開いたかと思うと、パイロットの言葉通りそこからミサイルが発射された。

ミサイルは少し離れたBETAの一群に着弾すると、観察していた隅島の想像以上の爆発を発生させBETAを薙ぎ払った。

『おおすげえな？ 思った以上の威力じゃねーか。なら今度はミサイル連続発射だ!! おら死ねや死ねや、ギャハハハ!!』

アンノウンは機体をゆつくりと回転させながらまるでガトリング砲のように腹部からミサイルを連続発射し、巨大な爆発を積み重ねる。

爆撃をくぐり抜けて近寄ってきたBETAたちには手間取った様子もなく、その手足を振るいあっさりと叩き潰している。

突撃砲も長刀も装備せず、文字通り素手で敵を相手取る戦術機。いったいどれほどの負荷が関節系にかかるだろうか。

そして強力な威力を持ったミサイルを機体内に内蔵し、さらにそれを何発も連続して撃つことが出来る。いったいどんな機体構造をしているのか。

正気の沙汰ではない。見たままを報告し記録するのが偵察部隊の役目ではあるが、正直に述べても自分の正気が疑われるだけではないかとすら隅島は考えた。

『HQよりガネット1へ。報告内容は適当なものか？ アンノウンは本当に一機だけか？ 状況の再度の報告を求める』

「ガネット1よりHQ、報告内容は本当だ。アンノウンは本当に

一機で戦い続けている！ 冗談じゃない！ 後方支援や待機してる部隊も見当たらない、本当に一機だけだ！！」

間違いを疑っているのか幾度となくHQから確認の通信が送られてくるのを、隅島は苛立ちを込めながら断言する。

まあ無理もない。報告が真実だとするなら信じ難い事実が浮かび上がってくるからだ。

少なくとも佐渡島におけるアンノウンの戦闘反応を確認されてから、1時間以上の時間が経過してるのだ。隅島の報告が合っているのならば、アンノウンは単機でBETAの群れ相手に戦い続けたことになる。

別に戦術機単機で複数のBETA相手に戦うことが不可能な訳ではない。それは一流の衛士ならば十分に可能なことである。しかしそれには暗黙の大前提として、周囲に後方支援によるバックアップや仲間のサポートがあることが不可欠となっている。

文字通りの意味で単機でBETA相手に戦い続けるなどという行為は、思考の範疇外なのだ。一流の技量などで何とかできる限界を超えているのが、BETAの物量である。

BETA一匹切り裂く間に二匹のBETAが忍び寄り、10匹のBETAを撃ち殺してる間に100匹のBETAが襲い掛かってくる。たった一人の戦場とはそんな理不尽な場所だ。

なのにその常識を、アンノウンは打ち破っていた。

攻撃を全て回避している訳ではない。明らかに要撃級や突撃級からまともに攻撃を受けているシーンが見受けられた。そもそも全身に戦車級がまわり付いている。

しかしそれらを何ら意に介した風もなく戦いを依然続行していた。要撃級に足を叩きつけて、そのまま踏み台にして飛び上がり、パワフルに回転して隣の突撃級へ回し蹴りを食らわしている。

驚くべき装甲の強度だった。加えて、戦術機とは違ったベクトル

で高い機動性を確保しているようでもある。跳躍ユニットがない分瞬発性に欠けるものの、代わりに重厚な安定感と力強い馬力を連想させる。

「次から次からへとわざわざ御苦労さまですつてな、ギャハハハハ！ そつちから来てくれてホントに手間が省けて助かるぜ！ おら死ねや、潰れる吹っ飛べ！」

隅島の耳に戦術機が拾った、垂れ流されるアンノウンのパイロットのものと思われる下品な声が届く。

聞くに堪えない微塵も品性を感じさせない内容だった。訓練された衛士というより、そこらのチンピラと言った方が相応しい。

そんなつらつらと細かなことに気を巡らせていたが、ふと気付くとアンノウンの周辺に群がっていたBETAに間隙が出来上がっていることに隅島は気が付いた。

「これは！？ 不味い！ 光線級が……ッ」

閃光が戦場を貫いた。

注視していたアンノウンが光に呑み込まれる。ほんの僅かにいた隙間から光線級のレーザーが、ピンポイントでアンノウンを打ち抜いたのだ。

人類から制空権を奪った元凶。地平線の果てから頭を出した瞬間撃ち抜くだけの精度と射程を持った光線級のレーザーは、現状の人類では防ぎようのない威力を持つ。

戦術機ですら直撃すれば、機体は衛士を含めて跡形もなく蒸発するしかない。

の、筈だったのだが。

「馬鹿な……ッ!?」

レーザーの照射が止んだ後、原型を留めた姿を見せながらアンノウンが現れる。

無傷だった。確実に光線級のレーザーの直撃を受けた筈なのに、その黒光りする機体には一片の欠けもない。

「光線級のレーザーに耐えただと!?!」

『つたくよう、さつきからチカチカチカチカと鬱陶しい奴らがいやがる。ウゼえんだよいい加減!』

迫る要撃級を殴り飛ばしながら、アンノウンがレーザー照射を受けた方向へ向き直る。

そうしてる間も散発的にレーザーを受け続けていたのだが、依然ダメージを受けた様子はない。

『丁度いいタイミングだ。さつき解禁した新兵器の威力を見せてやるぜ』

「何だ? 何をやる気だ?」

アンノウンが両腕を上にあげて開き、胸部を突きだすように構える。

胸部に装着された赤い二対の装甲板らしき部位が、徐々に輝き始め光を灯す。

『ハハ! 喰らいやがれッ!! ブレストファイヤーッ!!』

灼熱の光線が放たれた。

胸部の赤い装甲板から紅色に染まった光線が放出され、その凄まじい熱量で空気を歪ませながら射線上の大地を炙った。

途上にいた大小様々なBETAを軒並み巻き込み焼き尽くしながら、さらに熱線は勢いを衰えず彼方の先まで直進。

そしてついには光線級のいる場所まで到達し、滅却した。

そのまま胸部から熱線を照射し続けたまま、アンノウンは機体を横へとスライドさせる。

まるで撫で切りするかのように射線をずらされた熱線がそのまま扇状に注がれ、あれだけいた大量のBETAたちが一気に掃討される。

『ギャハハハハ！ 全部まとめてバーベキューにしてやるよ！！』

「これは…… 本当に現実なのか？」

眼前の信じ難い光景を見にし、隅島は忘我の心地のまま思わず呟いた。

ほんの数秒ほどの間に、たった一機の戦術機によりあれだけ大量にいたBETAが葬られていた。

残っているのは焦土と化した大地と、そこにそびえ立つ鉄色のマシンだけ。

しぶとく生き残っていた足元の戦車級の上に、アンノウンが足を下して踏み潰す。念入りにゴリゴリと動かして確実に止めを刺す様は、さながら虫を駆除するようだった。

「…… 化け物、かッ！」

単機でBETA群を壊滅させうる性能を持った戦術機。

まさに化け物としか形容のしようがない。歴戦の勇士であるがゆ

えに、なお一層隅島はそれを理解する。

『さて。ようやく一息ついたし、そろそろそっちの相手をしてやることにするか。なあ、そこで覗き見てる人たちをよお！』

「ッ！？ 全機警戒態勢！ ただし発砲は禁じる！ 指示を出すまで引き金に指をかけるな！！」

アンノウンが機首を隅島たちの下へと向けながらはつきりと宣言するのを見て、即座に隅島及びガネット中隊の面々が反応する。

歴戦の勇士だけあって、その反応の速さ、警戒は一級と呼ぶに相応しかった。

全機何時でも即応できる態勢を維持させつつ、隅島がアンノウンへと外部スピーカーを使って呼びかける。

「止まれ！ 所属不明機に告げる！ ここは日本帝国の領土内である。貴様の所属と氏名を答えよ！ 勝手な行動はするな！ これよりこちらの許可なく戦術機を動かした場合、即時攻撃を開始する！」

「ん〜？ ああ、日本帝国ね。なるほどなるほど……」

一人勝手に呟きながら、アンノウンがマシンの態勢を整える。

それは目の前の隅島による威嚇と警告を全く気にしていない様子であった。

「動くなと言っている！ 聞こえてないのか！！ こちらの質問に答える！ この警告が受け入れられないならば、次は撃つ！！」

『何だったかね〜。ああそうだ、思い出した。なあアンタら、今

から俺を横浜基地つてところに案内してくれや』

「よ、横浜だと?」

再三繰り返し返す警告をまたもや無視し、訳の分からない要求まで出してくる。完全にこちらの話を聞くつもりがないとしか判断できなかった。

加えてアンノウンは言葉だけでなく、機体も動かしこちらへと近付こうとしている。

もはや問答無用だった。

隅島は舌打ちし、中隊へと命令を下す。

「全機攻撃開始。容赦するな、撃墜せよ!」

隅島の命令が切欠となり、一斉に火器の火花が散った。中隊全機がロックオンしてたアンノウンへと向けて砲火を浴びせる。

例えどのような機種 of 戦術機であろうと確実にスクラップにする銃火であった。

しかし雨の如く降り注ぐ銃弾を受けながらも、アンノウンは無傷。その事実に関隅島は舌打ちする。

『……あアツ? なに攻撃してやがるんだテムエら』

まるでスイッチが切り替わったかのように、苛立たしげなものとなった口調が響く。

『ふざけやがって……』

隅島の命令が下ったのは、その眩きが出た前か後か。

次の瞬間、一気に場が動き始めた。

『ぶつ殺す』

「全機散開！ 各機連携を取って攻撃せよ！！」

ガネット中隊が、隊長である隅島の号令と同時にバラける。

それとほぼ同時に、アンノウンの腹部装甲から発射されたミサイルがそれまで中隊が留まっていた場所へ着弾し、爆発する。

余波が機体越しに響き、隅島の腹の芯に届く。

「なんて威力ッ」

間近で体感するアンノウンの内蔵火器の威力に改めて戦慄するも、先制打のそれを回避することに成功した。

ならば、取るべき手立ては機動力を活かした主導権の掌握。アンノウンの火力からして、相手に自由にさせるのは危険だと言いたいようがない。

敵の反撃を許さず、こちらが戦場の流れを独占したまま封殺する。

隅島がそう決断し命令しようとしたその時、ジェット機動していた部下の機体が二機、突如として爆散した。

「！？ ガネット6、ガネット8！」

『チマチマ小賢しいんだよ雑魚が。ほら死ね、とっとと死ね、早く死ね！』

宙を飛ぶ二つの拳がアンノウンの下へと戻り接続される。

あれに殺られたのだと理解し、揺れる内面を無理やり押し付けて

指示する。

「敵の腕に注意しろ！ 小さい分動きが速い！ 動きを止めるな、こちらの速さでかく乱してやれ！！」

『了解ッ、目標を棒立ちにさせます！』

伊達や酔狂に経験を重ねてはいない。

紛うことなき歴戦の猛者であるガネット中隊は、仲間が撃墜された事実を怒りを灯しながらも、決して動揺することなく操縦にブレはない。

即座にフォーメーションを構築し直し、それぞれが連携しながらアンノウンへ攻撃を敢行する。

『ガネット10、フォックス2！』

『ガネット7、フォックス2いきます！』

『あアッ！？ 鬱陶しいつつつてんだろが！！』

阿吽の呼吸で各機が散った瞬間に叩きこまれる重火器にも動じる気配がなく、返すように爆煙の中から飛んできた空飛ぶ拳に慌てて回避する戦術機。

その僚機の様子を確認しながら、再度攻勢をかけつつ思わず毒づく隅島。

「くそ、やはり駄目か」

現状持てる最大火力をもってしても、アンノウンの装甲に傷一つ付けられる様子がない。

あまりにも凄まじいその強度は、これまでの戦闘にて散々確認したものである。打つ手はないのだろうか？

いや、ある。隅島は胸中で呟く。

頭部で剥き出しとなっているコックピットキャノピー部分をピンポイントで攻撃する。

どれだけ堅牢な装甲で覆われているとはいえ、キャノピー部分は内部が見えるほど透過性を持った材質である。いくら強化していても、その強度には自ずと限界がある筈である。

無論、そこを攻撃することは難しいだろう。しかし、やらねばならない。

ならば選択の余地はない。やるだけだった。

「全機、攻撃を頭部に集中させる！ 剥き出しの操縦席を狙ってやれー！」

隅島の命令が下り、徐々に中隊からの火線が頭部へと集中していく。

絶え間なくジェット機動を維持しながら、執拗に銃弾を浴びせ続ける。

アンノウンはそれに対して頭部の前に片腕をかざすように置きながら、変わらずミサイルを発射し続け爆発を起こしている。

その腹部から吐き出される弾頭はまるで弾切れする様子もなく、当たらずとも各機に少なくないプレッシャーを与えていた。

「くそ、なんて機体だ」

内蔵火器とその装甲の堅牢性。目のあたりにした眼前の機体の性能に毒づく。

アンノウンの衛士の腕前は、確実に素人だった。それはこれまで

の行動から簡単に見抜ける。

しかし攻め切れない。あまりにも機体の性能差があり過ぎた。チマチマと中距離を維持したまま攻め続けても、アンノウンの装甲を敗れる気配はない。

『こちらガネット2、仕掛けます！ 援護よろしく！！』

「了解した！ 各機ガネット2を援護、手柄はやるから仕留めて見せる！」

情勢を見てとり、阿吽の呼吸で突撃前衛であるガネット2が突出した。

その行動をフォローすべく、他の僚機たちも一斉に動き出す。周りから執拗に攻撃を食らうも変わらずその装甲で弾き、アンノウンが自らに接敵するガネット2へと向けて腕を飛ばした。

『うおおおおッ！』

ジェット機動中に跳躍ユニットを動かし、機体をバレルロールさせ紙一重で飛んできた拳をかわす。

そのまま武器を長刀へと持ちかえ、突撃する勢いをそのまま維持したままガネット2は長刀を振り上げる。

狙いは一点、アンノウン頭部。

『くらええええッ！！』

ガネット2が振り上げた長刀は理想的な軌跡を描き、狙い違わずアンノウンの頭部へと振り下ろされた。

しかし、その刃先はキャノピーへと接触することなく、頭部の前にかざされていた腕に遮られた。

腕の装甲に一片も食い込むことなく、あっさりと長刀が折れる。

『な……!?!?』

『はい、終了オ!』

一瞬呆然としたガネット2の隙を利用し、アンノウンが回し蹴りを叩き込む。

振り抜かれた蹴りに胴体がへし潰され、両断される戦術機の姿が目に映る。

データリンクする隅島の情報から、ガネット2のマーカ―とバイタルデータが消滅した。

「ガネット2!?!? 岸里オツ!! おのれ、貴様 !?!?」

昔から連れ添っていた同期の戦友を落とされ激昂しかけた隅島の言葉が、突如として起きた味方機の爆発で遮られる。

素早く状況確認すると、アンノウンを牽制していた制圧支援のガネット10が撃墜されていた。

何が起きた? 疑問が浮かぶ中、隅島の目の前でアンノウンが戻ってきた片腕の再接続を行う。

「!?!? こいつツ……迎撃に撃った腕を遠隔操作し、背後から攻撃をツ!?!?」

『あー、飽きた。次の武器を試してみるか』

「くそつたれ、全機一旦引け! 態勢を立て直す!」

すでに中隊全体の三分の一の数の味方がやられてしまった。流れ

が悪い。

状況を仕切り直すべく号令を下し、乱れなく全機が引く。しかし改めてガネット中隊が攻勢を仕掛けるよりも早く、アンノウンが動いた。

『ハハハハ！ ほら食らえよ、ルストハリケーン！！』

突風が吹き荒れる。

まるで台風でも来たかのような強風がアンノウンの顎部にあるスリットから噴出し、中隊の一部を呑み込む。

「……なんだ？ 一体奴は何をしている？」

以下に強風だといえ、所詮は風である。

それは鋼鉄の塊である戦術機を吹き飛ばすほどのものではなく、また機体の機動を妨げるほどのものでもない。文字通りただ風を巻き起こしただけとしか思えなかった。

だが、当然そんな訳はない。

『た、大尉！ 隅島大尉！！』

「何だ、どうした！？」

『き、機体がッ！ 戦術機の調子が』

ザアっと、隅島の目の前で部下たちの機体が崩れ去った。

さながら砂となったかのように、細かな粒子となった戦術機のなれの果てが風に乗って飛散する。

「な……………」

『ギャハハハッ！！ スゲエなこれ！？ あっという間に錆び崩れやがった！ 面白いなあおい！！』

アンノウンから耳障りな嘲りの声が響く。

何が起こったまでは未だ把握してないが、その原因が目の前の敵にあることは理解できた。

敵意と戦意が隅島を包み、激情が口から漏れる。

「おのれ！ この狂人があッ！！」

跳躍ユニットを吹かし、突っ込む。

守勢に回れば負ける。あまりにもアンノウンの武装の威力が桁外れなのだ。

搭載されてるミサイルに、自由自在に切り離し操ることのできる腕。一瞬にして戦術機を塵にする風に、BETAを薙ぎ払った光学兵装と思わしき代物まである。

これらを使わせたなら自分たちが負ける。それを否応なく隅島は理解した。

「ガネット中隊全機へ！ 支援しろ、敵に接敵する！！」

風に呑まれて散った部下の数は三人。すでに残存する中隊の数は五機のみ。

筆舌に尽くしがたい失態である。もはやこれ以上恥を重ねる訳にはいかない。

残った四機が命令に従いアンノウン周囲を飛び回り、突撃砲から銃弾を吐き出しかく乱する。

狙うは一点。敵頭部キャノピー、コックピット。

ガネット2の攻撃を防いだアンノウンの腕の守りをこじ開け、直接そのポイントへ直撃をお見舞いする。

「帝国軍人を舐めるなあ!!!」

アンノウンが隅島へと腕を向けようとした瞬間、その間に丁度味方機が割り入って牽制し、アンノウンの注意を引き付ける。

例えこちらの攻撃の効き目がなくとも、敵の目を惑わすことはできる。

綻びた一瞬の猶予を見逃さず、ジェット噴射を使い味方機の上から飛び出す。味方機の陰に重なるように隠れてたこちらに気付いたアンノウンが再びこちらへ腕を向け、発射する。

「避けるッ！」

発射された拳を視界に収めながら、操縦桿を握りしめ絶妙な操作を行う。強引に機動を歪め、接近する拳に咄嗟に突撃砲をぶつけて軌道をずらし、戦術機の装甲のすぐ傍を交差させる。

汗が流れ、アンノウンの拳が隅島の機体を通り過ぎた。

無事に攻撃を避け切り安堵する間もなく、遂にアンノウンの懐まで到達。

しかし目の前には依然として、頭部を庇うように置かれている敵の腕がある。それがあある限り前から直接攻撃は不可能。

ならば。

「はあッ!」

背部兵装担架にマウントされてる長刀を掴み、抜き打つように叩きつけると同時、跳躍ユニットを吹かし上へ飛ぶ。

丁度前転するような形となり、アンノウンの腕へと叩き付けた長

刀が支点になるように隅島機が宙に浮かぶ。

後に遅れるようアンノウンの蹴りが放たれたが、その時にはもう隅島の機体は宙に舞っていた。

時間が引き延ばされたかのような感覚。極度の集中が1秒を何倍にも大きくし、隅島の意識を冴え渡らせる。

ゆっくりと機体がアンノウンを跨ぐ様に前転する、スローモーションのような視界の中、隅島は自分の下にアンノウンの頭部と、ここにある操縦席と内部にいるパイロットの姿まで確認する。

角度からアンノウンの腕に遮られることもなく、正に攻撃する絶好の位置取り。チャンス。

隅島は起死回生の攻撃へと移った。

補助腕を使い、短刀を取り出しアンノウンのコックピットに向けて投げる。しかし、これだけでは足りない。まだ一手加える必要がある。

跳躍ユニットを起動させ、宙にて機体の回転をさらに加速させる。強烈なGに歯を噛み締め、苦痛をこらえながら機体を操る。

「おおおおおッッッ！！」

機体を回転させ、たっぷりと遠心力の乗った踵落としをアンノウンに向けて打ち下した。

その踵落としの向かう先には、先に投げた短刀がある。踵落としと重なるように短刀の柄が叩き押される。

そして戦術機の重量と遠心力の勢いが重なった短刀の刃先は、そのまま真っ直ぐに直下にあるアンノウンのコックピットへと向かい突き立てられた。

それを成し遂げたのは、隅島が間違いなく一流の技量を持った衛士であつたからだつた。

アンノウンへ接敵しえた読み、至近距離の攻撃を避け切つた瞬間の判断力、曲芸染みた機動を交えた的確な一点攻撃を成す技術。

単純にマシンスペックが良く出て出来る芸当ではない。一流の衛士としての腕前が限界まで戦術機の性能を引き出したからこそ達成した出来事だつた。

しかし、腕前でどうすることもできない、圧倒的な彼我の性能差が世の中にはある。

「……………馬鹿な」

戦術機の踵落としの後押しによって叩きつけられた短刀は、狙い通りアンノウンのコックピットキャノピーに突き立てられ、そしてそのキャノピーに一寸の傷跡すら付けること叶わず砕け散つた。

起死回生の一手が目の前で崩れ、砕けた短刀の破片が舞うのをスローモーションに見届ける中、キャノピー越しにアンノウンの操縦者が嗤う姿が見えた。

絶望に浸る間もなく、機体の脚を掴まれ力任せに地に叩きつけられた。

「っが!?! ぐッ……………!?!」

『バアーカ。コックピット狙えば倒せるとでも思ってたのかよ。んな丸見えの弱点があるわけないだろうが、アホめ。マシンガーは装甲だけじゃなくネジにフレームからCPU、パーツ全部が超合金Z製なんだよ。当然、このコックピットカバーもな。そんなチャチな攻撃で破れる訳ないじゃん。ギャハハハ!!』

強烈な衝撃に前後不覚に陥ってる隅島の耳に、浅はかさを嗤うアンノウンの操縦者の声が響く。

それに憤る暇すらなかった。早くコンディションを持ち直すべく隅島は尽力していた。

悠々と目の前でアンノウンが腕を再接続するも、反応する余力はない。

『大尉！？　っち、全機弾をばら撒け！　奴の注意を引くんだ！　大尉を救出する！！』

『了解！　くそつたれ、この化け物め！！』

『あいつらもしつこいなホントに。そもそもどうやっても攻撃が効かないんだから、どう戦おうが無駄だったのに。そんなことも分からないのか？　まあ、どっちにしる逃がさねえけどな』

「止せ……逃げ……」

ここに至って、もはやアンノウンの言う通りこちらに打つ手はない。何せ相手に有効打を与える術がないのだ。

即時撤退以外に選択の余地はない。しかしそう告げようとする隅島の言葉は形にならず、ヒューヒューと苦しげな息が抜け出るだけだった。

『あーあ、んじゃ最初の的は向かってくるお前からだ。光子カビーム！』

アンノウンの目が光り、一筋の光線が放たれた。

眩い閃光の光線が隅島の救出に向かってきた戦術機へと直撃し、胴から上の上半身を跡形もなく爆発させる。

僅かに顔の向きを変えて、さらにアンノウンは光線を連射。

次から次へと恐るべき速射性で光線を放ち、生き残っているガネット中隊を狙い撃つ。

背を向け撤退に移った戦術機も後ろから撃ち抜き、一機たりとも逃がすことなく撃墜した。

そうして、残ったのは隅島とアンノウンの二体だけとなった。

12機いたガネット中隊は、隅島一人残して壊滅したのだ。

アンノウンの顔が地に倒れる隅島機へと向けられる。

仲間たちと同じように、その目から放たれる光線で撃墜されるのだらう。未来が予想された。

「く……そ……こんな、何もせずやられて……たまるかッ」

朦朧とした手つきで周囲をあさり、目当てのものに手をかける。

それは自決装置の起動スイッチ。高性能爆弾S-11を用いた、己諸共巻き込んだ自爆攻撃。

せめて一手、手傷を負わせん。隅島に残された最後の執念だった。

「くらい……やがれ……この野郎」

拳を握りしめ、カバーをごと叩き割ろうと腕を振り上げた。

しかし、その腕は振り下ろされなかった。

否、振り下ろすことが出来なかった。

「な………に………？」

吐息が白くなる。

隅島の全身に、強化衛士装備の至るところに霜が降っていた。コ

ツクピットの内装のあらゆるところが同じように凍り付いている。振り上げた腕はその態勢のまま凍結してしまい、幾ら力を振り絞ってもギシギシと僅かな音が鳴るだけであった。

そして隅島自身、気が付けば表情も凍てついてしまい、人形のようになんか一点を見たまま動くことが出来なくなっていた。

『
』

アンノウンが何か喋った気がしたが、その内容は聞き取れなかった。

目の前に迫るアンノウンの脚の裏を見たまま、隅島は沈黙し続ける。

かくして、隅島は座して直視したまま機体ごと迫る脚に踏み抜かれ、その身体はガラス細工の如く四散するのであった。

「さすがは鉄の城。武器が一つ一つ、全部が半端ない威力でいやる」

砕け散った戦術機の破片をマジンガーZの脚で小突き回しながらそう呟く。

光子力エネルギーを動力に稼働する超合金Z製のボディは、それそのものが一級の武器に等しかった。埋もれるほどBETAに纏わり付かれても難なく動ける馬力を持ち、レーザーから突撃まで、ありとあらゆる攻撃を受けてなおダメージのない装甲があるからだ。

加えて、内蔵されている幾多もの超兵装。ロケットパンチは一撃でBETAも戦術機も貫き、ルストハリケーンは一瞬にして巨大な

ロボットを砂塵に変え、ブレストファイヤーは雲霞の軍勢を駆逐し、光子力ビームは直撃と同時に着弾箇所を蒸発させた。

最後に試してみた冷凍ビームにしても、ほんの一瞬の間に戦術機を一機丸ごと凍結させてしまったほどだ。

二時間以上にも渡るBETAとの戦闘と、軍人の操る戦術機との戦い。この二つの経験と戦果が、十二分に男に実感させる。

さすがはマジンガーZ。さすがは鉄の城。さすがは神にも悪魔にもなれる力を持ったマシン！

「んじゃま、大体の武装も解禁したし。そろそろ行くとするか」

マジンガーZが歩き始める。

男が適当に備え付きの装置を弄れば、あっさりとキャノピーの一部に重なるように画面が現れる。

表示された画面の内容は至極シンプルで、中央に自機を示す黄点があり、そこから赤い矢印と目標を示す緑点。それに距離が表示されていた。

必要最低限の機能だけ付いたナビゲーション画面だった。

目的地までの間にあるだろう山や谷を完全に無視した、シンプル極まりないナビ。そもそもの大前提として進行上には大海原があったが、男は気にも留めていない。

ただひたすら真っ直ぐに。途上にある水路も陸路も、全てお構いなしに直行するつもりであった。

「コウツキユウコ、だっけ？ そいつのいる横浜基地ってどこだよ」

かくして、数千のBETAを殲滅し日本帝国の戦術機中隊を単機で葬った謎のマシンは、BETAたちの支配圏である佐渡島から悠悠と姿を消すのであった。

初めにその報告を聞いて香月夕呼が考えたことは、何を馬鹿なことを、だった。

発端は一昨日のことである。報告によれば帝国の佐渡島ハイヴ監視施設が、佐渡島にて怪しい動きを察知したらしい。

これまでのデータにない不可解なその動きを疑い、現地基地司令は歴戦の戦術機中隊を偵察部隊として編成。即時現地へと派遣し真実を確かめるべく情報収集を行った。

その結果もたらされた報告が、BETAの群れを相手に単機で相手をしていたという謎の戦術機の存在である。

周辺にバックアップ要因の姿もなく、支援砲撃などの援護もない。文字通りの単機であったという。

そして件の戦術機は絶大な戦闘力を持っており、それは光線級のレーザーの直撃を受けても支障なく戦闘を続行し続け、内蔵兵器にて群がるBETAたちを殲滅するほどだった、らしい。

「それはすごいわねえ。そんな戦術機があるんなら、もうBETAとの戦いなんてすぐに終わるわ。どこの国のものかは知らないけ

ど、何時になつたら量産するんでしょね」

報告を聞いた時に言った、夕呼の台詞だった。当たり前だが、夕呼はこの報告の内容を一切信じていなかった。

疑いにかけることすら馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに、棒読みな台詞で片付け目すら向けなかった。

それだけ報告の内容が馬鹿馬鹿しかったのだ。実際同じ報告を受け取った日本帝国の責任者にしても、ほぼ夕呼と似たような反応だった。

光線級に耐えるほどの装甲？ 単機でBETAを相手に出来る性能？ 内蔵された強力な光学兵器らしき兵装？

一体いつからこの世界はカートゥーンワールドとなったのだろうか。

革新的な新技術だとか、極秘の超技術だとか。言うのは勝手だがそんなものある訳がない。

どれだけ高度なテクノロジーだろうと、全ては地道な基礎技術の下積みがなければ実現できないのだ。新理論・新概念によるブレイクスルーが達成されたとしても、実用化までの境地に至るには相応の資金、資材といったバックアップが必要なのである。そのことは夕呼自身がよくよく知っている。

仮に何処かの研究室で何処かの一研究者が、光線級のレーザーに耐え切れる装甲素材の理論を完成させたでしょう。しかしそれを改めて成果として現物化するためには前述通りの手順がある。

そしてその手順の流れがあった場合、あらゆる権限を掌握し策謀を広げる夕呼が気付かぬ筈がない。

一部の界限で“横浜の魔女”と呼ばれているのは伊達ではないのだ。

そしてこれらの前提を理解した上で、夕呼はそういった前兆や前触れを察知した覚えはなかった。

よって出される答えは一つ、これはただの取るに足らない誤情報だ、ということである。

軍だとかプロだとか言えども、所詮は人間である。そういった誤解や先入観による間違いなど幾らでもある。

そう判断し、イチイチ脳のリソースを割り振ることを無意味と断じて、夕呼は報告を捨て去りこの件をあっさり忘却した。

香月夕呼にはこんな雑事に構うべきではなく、まだまだ彼女だけにしかできない、やらねばならないことが多く残されていたのだ。

そして、この時の判断が誤りだったとして、緊急事態の警報と共に火事場に立つこととなったのが、それから一日経過した後の今日だった。

「状況はどうなっているのでしょうか？」

「博士か」

そつなく白衣を着こなし変わりない伶俐な表情を見せながら姿を現した香月夕呼が、しかしその一片に穏やかならぬ気配を浮かべながら尋ねる。

夕呼の今いる横浜基地の司令室には現在、未だかつてない緊張感とざわめきに支配されていた。基地全体に警戒態勢が発令され通常業務が停止し、上から末端まで全ての人員が緊急への備えを取っている。

問いかけられたパウエル・ラダビノツド司令は、厳かに頷きながら画面を示した。

「状況は見ての通りだ。新潟の上越より上陸したアンノウンは、現在も南東方向へと直進中。途中にある防衛線に待機していた帝国の警戒部隊の攻撃も意に介さず突破し、真っ直ぐにこの横浜基地を目指している」

「本当に、途中にある山や川の存在を無視して一直線にこちらへと向かっていますね。随分と横着ですこと」

スクリーンに提示された地図と、その地図の上に重ねられた侵攻ルートのマークに、苛立たしそうに夕呼は言い捨てる。

そこには言葉の通り、まるで定規で引いたかのような直線のラインが引かれている。その延長線上には、横浜基地があった。

「到着時刻は何時頃になる模様で？」

「現在の状態のままアンノウンが速度を維持した場合を想定しておそらくは後2・3時間の内にはここに辿り付くだろうと考えられている」

「そうですか……」

（あまり猶予はないということか）

後半は口には出さず、胸中に隠す。

司令室の画面の一つには、今なお横浜基地へと向けて侵攻しているアンノウンの姿が現地カメラから中継されていた。

跳躍ユニットもなく、機動性を重視した現行の戦術機の開発思想とはかけ離れた骨太なデザインをした機体。それはまさしく昨日報

告に上げられた佐渡島にてガネット中隊が遭遇した存在であり、夕呼が誤情報だと切つて捨てた代物だった。

さて、その件のアンノウン。先に述べたように跳躍ユニットもなく、到底高速機動できるように見えない。なのにどうやって、遙々佐渡島からこの横浜基地まで、地図上を直進してきているのだろうか。

答えは単純で、マシンをそのまま脚部の二本脚を駆使し、走らせているだけであった。

ただそれだけのシンプルな移動手段を使うことにより、現在アンノウンは時速360km前後の速度で疾走し、途上にある川や山などをクリアしていたのだった。

あまりにも原始的でお粗末な移動手段だったが、しかし現実になんな手段で敵は近付いてきている。

ならばそれを非現実的だとか常識的ではないと否定し片付けるのは、そちらの方が遥かに愚行だろう。例え訳が分からなくても、事実が変わることはないのだ。

「防衛線を突破したとのことですが、こちらからの攻撃は効果がなかったのでしょうか？ 敵は単機と聞いたのですが」

「無論、迎撃は行われた。現在も追撃部隊が編成され、予想進行地点に対しての布陣なども行われている。しかしそれらもこれまでの経過を見て、信じ難いことだが効果は薄いとしか言えないだろう」

数枚の資料がテーブルの上に広げられる。夕呼はそれを手にとり眺める。

アンノウンの行った暴虐がそこには記録されていた。

始まりは新潟の上越への上陸からだった。ソナーの反応から海中

から接近する正体不明機の存在を帝国は確認。アンノウンの上陸と合わせて、予め上陸地点へ待機させていた部隊を使って接触。武装解除を勧告するもこれを無視し、アンノウンは横浜基地へと向かい疾走を開始した。これをもって部隊には発砲許可が下り、迎撃。第一の戦端が開かれる。

しかし迎撃部隊の一斉攻撃を受けるも、アンノウンはこれを受け無傷。アンノウンの衛士のもと思われる外部スピーカーによる恫喝と共に、アンノウンからの反撃が開始。

レーザーらしき光線や熱線、ミサイル他といった数々の内蔵火器を使用し、瞬く間に展開していた迎撃部隊を殲滅した。

その後部隊の全ての沈黙を確認した後、アンノウンの行動は再開。以後このパターンを幾度か繰り返すこととなる。

実に不可解な行動パターンである。いくら敵を迎撃するためとはいえ、わざわざ完全に敵が沈黙するまで攻撃する必要性はない。ましてや、目的地へと向かい急行中ならなおさらである。軍事的に考えても、優先する目標があるのならば普通は可能な限り交戦を避けていくものだ。

それなのに、このアンノウンは一直線に横浜基地を目指しながら、攻撃を加えた部隊に対して執拗な反撃を敢行する。完全に殲滅し抵抗する余力がなくなるまで攻撃し続ける。

論理的な行動ではない。むしろ受ける印象としては非常に単純な、刃向う奴には容赦しないといった子供のようない屈が垣間見える。

「どういった思惑があるのか知りませんが、どちらにしるこのまま看過する訳にはいきませんね」

「当然だ。こちらとて、むざむざと無為に散らせるために兵を集めている訳ではない。幾ら精強だろうと、所詮敵は単機だ。動員できる全ての部隊を動かし、撃破するための布陣を整えている」

地図上の一点を示しながら、ラダビノット司令は述べる。

そこは現在のアンノウンの進行速度からみて、おおよそ1時間後に接敵するであろう地点である。

時間的、地理的都合から見て、そこが動員できる最大戦力の使えるポイントであり、同時に敵を阻止できる最終防衛ラインであった。

「了解しました。ではこちらにもA-01を派遣しましょう」

「良いのかね？」

「はい。横浜基地の防衛は最優先事項です。協力できる余地があるのなら手伝うべきでしょう」

つい先日全面開放されたばかりの横浜基地の状態は、お世辞にも良いとはいえない。慌ただしく慣れない雰囲気の中、迎撃態勢を整えるのは難しいものだろう。

しかしそんなものは、夕呼にしてみれば怠慢でしかない。戦うのが軍人の本分なのだ。それを尽力せずはどうするのか。

本来そんな他人のミス尻拭いをしてやる義理などないのだろうが、しかしこの場合のミスによる被害は軍だけでは済まない。夕呼とて手伝わざるをえないのは自明の理であった。

とはいえ、そんな思考をしながらも実のところ、夕呼にせよラダビノット司令にせよ、どちらもそうそこまで事態を悲観してはいなかった。

先に言ったように、所詮敵は単機なのである。どんな新兵器があるろうが、装甲を持つろうが、それでもただ一機だけなのだ。

数は力である。仮に現代兵器で重武装した兵士が石器時代の人間相手に戦おうとも、100人、1000人、あるいは1万人相手に

戦えば、負けてしまうのだ。

つまるところ、負ける筈のない戦いだっただ。だから夕呼にせよラダビノッド司令にせよ、アンノウンの出所や目的を警戒こそすれど、勝敗には注目していなかった。

夕呼はその後、幾つかの確認事項を話し合った後、司令室から退出した。

やるだけのことをした以上、あそこに留まっても夕呼には意味がない。戦いの指揮を取るのは夕呼の分野ではないのだ。

その思考の巡りはアンノウンの由来に関して飛んでおり、いったいどの勢力が持ち出したマシンか。何を目的をしているかを考えていた。

中にはすでにアンノウンを捕縛した後、その技術を吸い取りどのような使うかという、狸の皮算用に等しいところまでいつている部分すらあった。

そんな彼・彼女らの考えは1時間後、完全に吹き飛ばされることになる。

「アンノウン、横浜基地への進行速度止まりません！ 真っ直ぐこちらへ向かって来ています！！」

「一部の残存部隊が追撃をかけているものの、効果見込めず！

支援砲撃を要請されています！」

「前線から救援要請が多数！ 負傷者の救助に手が足りてないと
言ってきています！」

次々と司令室に、訃報を伝える通信が入る。

すでに構築されていた戦線は崩壊し、各部隊はバラバラの様相を
晒している。

そしてそれを成したアンノウンは悠々と進行を続けていた。

「なんとということだ……！」

呆然とするラダビノット司令の隣で、夕呼が齒軋りする。

あまりにも想定が過ぎるアンノウンの戦力に、彼女はそうせざる
を得なかった。

戦端は万全に整えられた状況から切られた。

こちらの設定した地点に配備された迎撃ラインは時間に間に合い、
ほぼ完璧な陣形が用意された。

そして愚直に直進を続けるアンノウンが用意したキルポイントへ
踏み込んだ瞬間を狙い、一斉攻撃は開始された。

周囲一帯からの集中された十字砲火の洗礼。アンノウンには避け
る暇どころか、逃げるスペースそのものがなかった筈だった。

しかし、その砲火の雨をアンノウンは凌ぎ切った。

おおよそ単機に向けるには過剰過ぎる火力を浴びながら、無傷の
ままだったのだ。

そして予想外の事態に戸惑う暇もなく、アンノウンの反撃が始ま

った。

アンノウンの胸部にある赤い装甲板から、強烈な熱線が照射された。

それは光線という意味では光線級のレーザーに似た代物だったが、範囲という一点が光線級とは異なっていた。

アンノウンから放たれた熱線は極めて広い広角を範囲に収め、展開した軍の一角を纏めて焼き払ったのだ。

尋常ならざる出力とエネルギーによる返礼だった。光線級なぞ遙かに凌駕する威力の一撃である。

なにしろ、たった一機のマシンの一撃により完成されていた陣形の一角が消し飛んだのだ。この瞬間、全兵力の約二割が削られたのである。

事実上の壊滅だった。

追撃をかけられアンノウンによるさらなる攻勢が続く中、各部隊の面々は良く働いた。

崩壊した前線を立て直そうと必死に指揮をとり、アンノウンへ向けて生き残った部隊が攻撃をかける。しかしそれらの攻撃はアンノウンの装甲を貫くことはできず、逆に全て返り討ちにされるだけだった。中には動きを止めようと戦術機で相手に組み付こうとした者もいたが、根本的馬力が違うためにあっさり戦術機の関節を破壊され、撃ち落とされた。

集結した軍の火力を物ともしない装甲を誇り、一撃で展開した部隊を吹き飛ばす超威力の兵装を持ち、そしてそれらを連続数時間以上もの間保持し続けるだけの継戦能力を持った化け物。

かくして、横浜基地最終防衛ラインは当然の帰結として崩壊したのだ。

そしておおよそ目に入る兵力を一通り撃破出来た時点で、アンノウンは移動再開し、横浜基地へと向かった。

それが香月夕呼が司令室で見た事態の全貌であった。

事態は現在進行形で動いている。

現地では残存兵力と掻き集めた部隊を投入し、何とかしてアンノウンの進行を緩めようと遅滞戦術を敢行している。

しかし変わらずそれらはアンノウンに対して効果は見込めず、鎧袖一触されるだけ。アンノウンの行動パターンを見込み、捨て身で自身を囿にしようとする部隊も出るも、ここに来てアンノウンはこれまでの殲滅優先の行動パターンを変え、横浜基地への進行を第一にしていた。

もはやアンノウンが横浜基地まで到達するのは、時間の問題だった。

「香月博士、すまないが脱出の準備を始めたまえ。計画の資料を急ぎ纏め、脱出するのだ」

「司令や他の方々はどうするおつもりで？」

「我々は軍人だ。許可もなく勝手に基地を放棄して逃げることは出来んよ。それにこの横浜基地はオルタネイティブ計画における重要拠点。命を惜しんで逃げることなど許されはしないのだ。最後まで戦い続けるつもりだ」

「ならば、私もそれにご同行させてもらいましょう」

「しかし、博士……貴方には……」

「勘違いのないよう言っておきますが、私としても計画の完遂に

はこの横浜基地の存在は必要不可欠なのです。ここから私だけが無事に脱出できたとしても、それでは意味がないのです。それに元より身も蓋もない話ですが、計画の資料を纏めるだけの時間ももう残されてはいないでしょう」

「そうか……すまないな香月博士」

「いえ、私にも予想のできなかった事態でした。致し方がありません」

目じりに力を込め、気の強さを表情に出したまま夕呼が司令室にある画面の一つを睨む。

もう間もなく、アンノウンが横浜基地の視界に入る筈であった。

地響きを立てて、マジンガーZの脚が大地を抉る。

全力疾走から急激に静止がかけられ、慣性の名残を引きずりながらようやくやく止まった。

「到着、と。ようやく着いたか。ここが横浜基地か？」

そういうマジンガーZの正面には、コレだと分かり易い形をした基地の姿が目視で確認できていた。

確かめる方法はなかった、まさかここまで来ておいて間違いだと

いづことはあるまい。

「んじゃま、どうするかね。 適当に呼べば向こうから来るか？
ん？」

マジンガーZの装甲に火花が散った。機体の周囲に砲弾が着弾し、土塊を巻き上げる。

基地の周囲におかれた迎撃施設と、追撃していた残存部隊による攻撃である。幾らか直撃を受けるも、もちろん一切の痛痒も感じなかった。

時間稼ぎにもならない今更な攻撃である。それでも諦めることなく戦術機が連携を取ってマジンガーZの周囲を飛び交い、攻撃を続けている。

「つち、鬱陶しいなあコラ！ いい加減目障りだったの」

ロケットパンチを打ちだし、リモートコントロールで戦術機をぶち抜き破壊させる。基地の迎撃施設には光子カビームを連続して照射してやり破壊してやった。

全滅とまではいかないが、とりあえず邪魔が入らない程度に周囲の沈黙を確認すると、腕を呼び戻して接続し、彼は基地へ向かって叫んだ。

「おい！ その基地の中にコウツキユウコって奴がいるだろ！
言いたいことがあるからそいつを目の前に連れて来い！！」

外部スピーカーを使い、拡大された音声が青空に響く。

いきなりの彼の行動だが、しかし横浜基地に目に見えて新しい反応はない。

逆に顕著な反応を示したのは展開していた戦術機部隊の方で、大

半が返り討ちされた中でも諦めず攻撃の隙を窺っていた残存機らに、
明らかな動揺が走っていた。

「10分間だけ何もしないで待つてやる！ 分かったならコウツ
キウウコをさっさと連れて来い！ 10分経つても反応がなかった
らしょうがない、基地を完全にぶっ壊す！ それからこつちから何
もしないって言ったがな、攻撃されたら反撃はするからな。死にた
くなけりや部下どもに攻撃させないことだ。分かったか？ 以上だ
！」

そこまで言ったところで、彼はスピーカーのスイッチを切った。
どっしりとシートに腰かけ、コンソールに行儀悪く足を乗せなが
ら時計を見る。

「こんだけ言ってやれば部下の一人や二人報告に行ってるだろう
し、コウツキウウコが基地の中にいればちゃんと伝わるだろう……
多分。出てくりやそれでよし。出てこなかったとしたら、それはそ
れで別によし。その時には宣言通り基地を潰して、まあ後は好き勝
手やらせてもらうか」

ぶらぶらと楽な姿勢を取りながら時間を潰す。

今まで上陸から到着までの数時間、戦い通しだったので丁度良い
休憩だった。とはいえ、何の暇つぶしの道具もなく退屈ではあつた
が。

てつきりまた、彼からすれば何処かの生き残った連中の一人か二
人が、血走って攻撃でもしてくると思つていたのだが。お陰さま予
想を裏切り思いのほか平穏な時間を過ごしている。

反撃で待ち時間を潰せると思つていたので、全くもって面白くな
い。自分から言ったことだったので、手を出しはしなかったが。

そんなこんなで待つこと、数分が過ぎた。

そろそろ時間だと足を下ろした男が、横浜基地を注視する。ここで動きがなければ何の躊躇もなく破壊に移るところだったが、丁度タイムング良く向こうも動いた。

基地の建物から白衣を着た女性が、護衛らしき人間を数人引き連れながらグラウンドへと出てくる。

望遠を拡大して直接女性の顔を拝んだ男は、へえと軽薄な様子で声を出しながら口笛を吹いた。

女性はキツイ眼差しを彼の方へと向けながら、目に見えて強気な姿勢を崩さず泰然としていた。

片手に拡声機を持ちながら護衛たちを待機させ、一步二歩と前へと出てくる。そんな彼女へ対して外部スピーカーのスイッチを入れ、話しかける。

「アンタがコウツキウウコかい？」

『ええそうよ。それで？ あんたのお望み通り出てきてやったけど、これからいったい私は何をしたらいいわけ？』

拡声機越しに女性 夕呼が皮肉気な声色を隠さず、挑発的に言葉を返す。

周囲の戦術機たちも何時の間にやら、指示が出されたのか慎重に配置に着いている。いざという時、どうにか夕呼のカバーに入るためだろう。

そんな周りの警戒を無視し、彼は言った。

「いいや、アンタに何かしてもらおうってことじゃない。手を組まないかって話をしたいだけだ」

『？ ……どういふことよ？』

「すつとろいな。協力してやるって言ってんだよ、テムエらの計画にな。なんだったか？ オルトロ…いや、アルタイ？ ……ああ そうそう、思い出した。オルタネイティブ計画、だったか？」

『！？ ツ…なんですつて！？』

「俺の力はたつぷりと見せてやっただろ？ そこの軍が幾ら束になるうが、纏めて吹っ飛ばすスーパーロボットの力をな」

夕呼の表情が一際引き締まり、これ以上とない険しい視線が彼へと注がれる。

その顔を男は嘲笑を浮かべて眺めながら、改めて宣言するように言う。

「この俺とマジンガーZが、お前らオルタネイティブ計画の力になつてやるって言うてんだよ。ギャハハハハハハハハ！！！！」

第二話 佐渡島ハイヴ陥落

あの後、とりあえず何とか気を取り直した夕呼による指示に従い、男は横浜基地の格納庫の中へとマジンガーZを移動させた。

無論その周りは銃口を向けた戦術機が囲っているも、特に気した様子もない。

指示された戦術機用の格納庫の中に入ると、マジンガーZが膝を突き、片手を胸の前に置いた状態で停止する。

すると男は間を置くことなくキャノピーを解放して飛び出し、器用にマジンガーZの機体を伝って地面へと降り立った。

いくら膝立ちとはいえ、一歩足を踏み外せば10m近い高さから叩きつけられる危険がある。しかし男に全く物怖じしていない態度である。

「随分とふてぶてしい態度な男ね。まあ、さっきの台詞で分かっていたことだけど」

男の様子を観察していた夕呼が、わざわざ聞こえるように言う。夕呼の周りには数人の護衛が待機しており、男への警戒を一切解いていない。よくよく周りを見れば護衛だけでなく、目に着くことから着かないところまで、格納庫内に多くの軍人が存在し憎々しげな視線を男へと注いでいる。中には隠す様子すらなく銃に手を触れさせている兵士すらいる。

当たり前の話である。この男が引き起こした混乱によりどれだけの人間が死に、軍に被害が出たと思っっているのだろうか。

夕呼自身を含めて男に好意的な人間など、一人もいなかった。

「それで、アンタは何なの？ 何が目的なわけ？」

「おいおい、いきなり聞くのがそれかよ？ そう聞かれて俺はど
ー答えればいいんだ？ 人間だつてでも言えば満足か？」

「とぼけてんじやないわよ」

視線だけで射殺しそうな目が男を掴む。

そんな目で睨まれながらも、男はにやにやと軽薄な態度を取つた
ままだつた。

「私の力になるつて言つておきながら、実際にやったことはただ
の無差別な破壊工作。協力するだなんて、どの口が言えるのかしら
？ 嘘をつくにももつとマシな口上を用意して来なさい」

「いや、嘘じゃないぜ？ 俺は本当にお前らに協力してやるつ
もりだ。賭けてやってもいい」

「信用できないつて言つてんのよ。話にならないわね」

吐き捨てるように夕呼は言い捨てた。

察しの悪い男を嘲るニユアンスも混ぜた台詞であつたが、逆に男
は男で馬鹿にするように鼻で笑つた。

「ほーほー、それじゃこのせつかくの俺の申し出を、アンタは断
ると……そういうことでいいんだな？」

「しつこいわね、さっきから言ってるでしょ。アンタの話なんて
受ける受けない以前の問題だつて。どうしても話を進めたいならま
ず自分の素姓を明かしてからにきなさい」

「そうかい、そりゃ残念。なら代わりにアメリカか中国あたりにでも売り込むことにするか」

男が無造作に言った台詞に、空気が変わる。

僅かに眉を動かすだけに留めて反応を抑えるも、表情を僅かばかり固めた様子で夕呼が喋る。

「……何を言っているの？ まさか今と同じ調子で他の国と交渉して、受け入れられるとでも？ 冗談は休み休みにしてくれないかしら」

「ツハ。寝言ほざいてんのはテメエだろ、コウヅキユウコさんよお？ 逆に聞くけどよ、まさか本気で他の国が俺を受け入れないとも思ってたんのかよ？」

「……………」

口を閉じて沈黙した夕呼を見て、男は調子づいたように意気揚々と両手を広げた。

まるで周りを囲んでいる兵士たちにアピールするように、朗々と訴える。

「そうだよなあ！ 俺を受け入れない筈がねえよなあ！ 何せ俺は、たった一人で向かってくる軍隊を返り討ちにしてやった奴なんだからよお！！ 信用できない？ 素性が怪しい？ っは、なにそれ？ そんな小さなこと気にして逃すようなモンじゃねえだろうがオイ！？ なあ？ お前らは怪しいからって理由で、目の前にある札束に一切手をつけず無視するか？ しないだろそんなこと！！」

耳障りな哄笑が格納庫の中に響く。
ひとときしり笑い終わると、男は改めて夕呼に目を向けて喋り始める。

「コウヅキユウコさんよ。アンタ言つてたよな？ 散々暴れって協力するとか訳分からないって。つまりこのためだったんだよ、この俺様がわざわざ暴れまわってやった理由はよ。この俺を高く売りつけるために、テメエら周りの馬鹿な奴らでも一目で理解できる形で俺の力を示してやったのさ。これで馬鹿なガキから老人まで俺の価値は十二分に理解できたろう？ さて、これでもアンタはまだ他の国が俺を買わないって言えるか？ そんな妄言を言い続けていられるか？ ええオイ!？」

果たして男の言つた通り、アメリカや中国といった他の国が男を受け入れるだろうか？

それは確かに、まず間違いなく受け入れるだろう。夕呼は忌々しい限りだが、その事実を受け入れていた。

成程、確かに夕呼の言う通り男は怪しい。テロリスト同然のその行為を容認することなどまともに考えて出来る筈がない。

しかし、そんな不安要素を無視できるほどの価値を持っているとなれば話は別だった。

たつた単機で展開していた防衛線を突破し、立ち向かってきた部隊の攻撃を物ともせず逆に殲滅してしまうほどの攻撃力。

既存の戦術機概念を大きく覆すその力は、喉から手が出るほど各国から求められるだろう。それこそ当人の怪しさやデメリットを呑み込んでまでだ。

そして男のやったことは殊更派手な行為だった。それは隠蔽など出来る筈がない規模だった。確実に男の存在とその価値は周辺諸国に漏れ渡る筈である。

「理解したか、コウヅキユウコさんよ？ テメエに選ぶ権利なんてないんだよ。俺が有り難くも”選んでやってる”んだ。テメエが断るってんなら、俺はただ別の陣営に同じ話を持ち込めばいいってだけなことだ。わざわざテメエらに執着する理由なんてない以上、勿体ぶつても何の意味もないぜ？ さて、それを踏まえてもう一度聞いてやる。俺を受け入れるかどうか、どーする？」

「そうね、話は理解したわ。思ったよりもアンタの頭が回るってことについてね」

そして同時に、やはり浅はかな考えしか持っていない男であるということも。夕呼は言葉に出さず静かに述懐する。

こいつはどうにも信じ難いことだが、何処かの組織の人間ではない。いや、真偽はどうであれ、組織に属して動いてる人間の考え方をしていない。

無駄に自分が上にないと気が済まないプライドの持ち主であるといい、即物的な計算で動く無計画な行動といい、職員としては失格としか言いようがない。

ただの一個人が手に入れられる力ではないが、しかしどうしても目の前の男は何らかの組織のバックアップを受けているようには見えなかった。

まあいい。夕呼はその疑問をとりあえずは横に置いておく。

今分らなくとも、後になって調べてやればいいだけのことだ。マシンについても分解して調査すれば判明することもあるだろう。

さしあたっては底の知れたこの目の前の男を、当人の思い上がり と勘違いを利用してあしらってやることだった。

夕呼はそんな思惑を埋没させながら口を開く。

「疑問があるんだけど、聞いても良いかしら？」

「あん？ いいぜ、聞いてやるよ」

「アンタの話を聞く限り、別に私に限らずどこの陣営でも良かったみたいけど。それなら何で私のところへ来たのかしら。どこでもいいというのならこんな地方の一基地なんてところに寄らず、それこそ最初からアンタの言ってたアメリカなり中国なりへ言った方が良かったと思うけど？」

「んなもん、アンタがオルタネイティブ計画って奴の責任者だからに決まってるだろうが」

あつさりと男が言った言葉に、夕呼は内心で波を立てる。

オルタネイティブ計画は極秘の計画である。知る人は知るが、その知るものは限られるのが現実である。

何故この目の前のような底の浅い、安い男風情が知っているのか。また知っているとして、どこまで知っているのか。穏やかではないらしい事柄である。

ともあれ、この場には夕呼と男以外の人間が多くいる。当然、計画のことを知るべきでない人員も。そのことについて話すのは得策ではなかった。

「何のことだが知らないわね。何かの間違いじゃないの」

「とぼけんなよ。知っているんだぜ、聞いたからな。アンタがオルタネイティブ計画って奴の責任者で、そしてそのために大きな権力を持っているってこともな。だからアンタを最初に選んだんだよ」

「……どういうことかしら？」

意図を読まず話を合わせない男に苛立ったものの、いい具合に焦点をずらした男の会話に合わせて疑問を返す。

「コウヅキユウコさんよ、アンタ偉いんだろ？ ならアンタが良しと言えば、誰もその決定に逆らわないだろうが。しかも権力が大きいってことは、つまりそれだけアンタが良しと言わせられる範囲が広がってことだ。ならそれだけ、俺の要求に自由に応えられるだろうよ。俺は俺の要求を言う時に、アンター一人に訴えればイイってわけだ」

「何？ つまりアンタ……私のことを何でも叶う便利な窓口だから選んだとでも言うつもり？」

「むしろそれ以外に理由なんかいるか？ おいおい自惚れんなよ、アンタの他よりも優れてる点なんてそんなところだろうが」

「な…………ツ」

あまりにも夕呼を馬鹿にした発言に、思わずはらわたの底から煮えくり返る怒りが込み上げてくる。

自惚れている男に自惚れていると馬鹿にされることが、これほど腹立たしいものとは思わなかった。実に不愉快極まる。

とはいえ、付き合ってるのはさらに馬鹿馬鹿しい。子供じゃないのだ、いちいち口喧嘩してる暇なんてない。

「随分と買い被ってくれるけど、あいにくとそこまで無茶な要望を実現することなんてできないわよ。アンタは知らないのでしょうかね、組織つてのはそんな個人の我儘でどうにか出来るもんじゃないの。勝手に思い込むのは自由だけど、それを他人に押し付けな

いってくれる>」

「へえ？　じゃあ試しに聞くけどな、お前が今俺を受け入れると宣言してそれに反対できる人間が、この基地の中にいるのか？　□だけじゃないぜ。ちゃんと権限として、お前の決定を覆すって意味で反対できる奴だよ」

「それは……………」

「いねえだろ？　そうだよなあ！　自分のお膝元の統制ぐらいちやんと取っておかなきゃ、外への根回しなんて安心してできないよなあ！？　ギャハハハ！！　個人の我儘が許されない？　違うだろうが！　”偉いからこそ”、組織で個人の我儘が許されるんだろうが！！　そこらの一般兵が司令官の贅沢に文句が言えるか？　仮にそれが軍紀違反だったとして正々堂々と指摘できるか？　出来たとしても取り締まる事が出来るか？　はは！　出来る訳ねーよ！」

夕呼が答えるよりも早く、嘲笑しながら男は告げる。一方的な言葉は確信している男の心境を雄弁に表していた。

成程、チンピラはチンピラなりに世の中というのを知っているようである。確かに組織の中で清廉潔白な人間など珍しいにもほどある。

偉ければ偉いほど、ベクトルはどうであれルールを破るものである。それは何も自己本位な欲望を持ったものに限った話ではない。自分の部隊に優先的に補給回すために補給担当の鼻に賄賂を嗅がせる将官や、順番を飛ばさせて自分たちに送らさせる有能な指揮官など腐るほどいる。

それらが見逃されているのは、単純に失点以上に組織に利益をもたらしているからだ。そして問題を握り潰せるほどに権限を持っているからでもある。

しかしだからと言って、その恩恵に目の前の男が与れるとは決ま
ってはいいない。

「さーて、もうそろそろいい加減に返事を貰おうか。コウヅキユ
ウコさんよ?」

散々言い散らして満足したのか、男が夕呼へ選択を迫る。
それを受けて夕呼は男と視線を合わせる。答えは決めていた。

男の持つ力は非常に魅力的である。

単純な戦術機の持ち得る戦力を遥かに超えたそれは、困い込めば
確実に今後のあらゆる勢力との交渉においてカードとなる。

何もマシンの設計図そのものをやりとりするだけではない。あの
マシンに搭載されてる内蔵兵装の一つでも持ち出せば、それは十分
に有用なものとなる。

そして実際にマシンが持ち得る実行力も極めて有意なものだ。オ
ルタネイティブ計画の責任者として、夕呼には様々な裏工作を行う
必要がある。中には交渉だけでは片付かない荒事もあるだろう。場
面は少ないとはいえ、そんなときにあの力は非常に役立つことが保
証できる。

受け入れて損はない。夕呼はそう胸中の計算で答えを出し、結論
を言った。

「お断りよ。もっと頭が良くなってから一昨日来なさい」

「……………あア?」

ぼりぼりと男が耳を掻き、改めてギラついた視線を夕呼へ向ける。
不機嫌さを全力で表情で表しながら、男が喋る。

「聞き間違えたか？ もう一度答えを言えよ。なんて言った、テムエ」

「何度でも言っただけよ。お断りだっただけよ。アンタの要求なんて飲む気は全くないわ。御免あそばせ？」

「そうかい、良く分かった。せつかく人が慈悲をかけてやってチヤンスをやってやったっていうのに、俺の価値も分かっちゃいない馬鹿どもには所詮無駄な行為だったか。全く、時間を無駄にしたぜ」

やれやれと、額に手を当てて首を振る。まるで豚に真珠とでも言いたげなポーズであった。

そのまま両腕を広げて、まるで注目を浴びるスターのように構える。

「交渉決裂だな。それじゃ事前に行った通り、別の国に話を持ちこませてもらうぜ。まあその前に、人の行為を踏みにじりやがった馬鹿な奴らに少しばかり報いを与えてやるがな。覚悟はいいか？」

あ？

「子供ね。自分の言うことに従わなかったから腹いせに攻撃するなんて。いや、子供でももっとマシな行動をとるわね」

「っは！ 子供で結構。俺にはそれが出来る力がある。今更後悔しても遅いぜ？ 基地ごと纏めて叩き潰してやるよ。俺の力は散々見せつけてやっただろう？ ギャハハハ！！」

「そうね、確かに基地ごと纏めて叩き潰すことも出来るわね。その力なら………とところで、アンタに一つ言っておきたいことがある

んだけど」

夕呼が一人笑い続ける男へ、右手を挙げて語りかける。
それに男は笑いを収めて、問い返す。

「あ？ 今更何なんだ？」

「そうね、せっかくだしアンタの勘違いを解いておいてあげよう
と思ってるね。教えてあげるわ」

「勘違いだあ？ 何のことだよ？」

夕呼は、挙げていた右手を下した。

「力があるのも価値があるのも、アンタにあるんじゃないくて、ア
ンタが乗っていたマシンにあるってことよ」

「……は？」

疑問の声を上げた男のこめかみに、銃弾が食い込んだ。

弾けたように血飛沫が飛び散り、男が吹っ飛ぶ。床に身体が叩き
付けられ、四肢を不自然な形にのばしたまま完全に脱力する。

だくだくと広がる血の跡を見ながら、肩をすくめて夕呼はつまら
なそうに呟いた。

「まあ、死ぬんだから意味もないことだけどね」

あれだけの大量破壊を犯した輩である。何の備えもなく会う筈が
なかった。

最初の恫喝の時ならばともかく、僅かばかりでも交渉しようとい

う取っ掛かりを得た時点で、夕呼は策謀を巡らせていたのだ。横浜の魔女という異名は伊達ではない。

彼にこの格納庫へ来るよう指示したのも時間稼ぎを兼ねた誘導であり、その間に人員を集め指示し、いざという時のための狙撃班や合図用の符号を組んでいたのである。

まさかノコノコと自分からまだ安全であるマシンから降りてくるとは思ってもしなかったものの、そうでなくとも緊急時には戦術機部隊が捨て身で閉鎖空間である格納庫の中に敵を封じこみ、施設諸共S-11を使って吹き飛ばす算段は出来ていた。勿論、その時のための夕呼の避難経路は確保済みである。

「結果だけを見れば取り越し苦労だったみたいだけど」

頭に狙撃銃の一撃を受けた馬鹿な男の死体を見ながら、夕呼はホントに相手が馬鹿で助かったと呟く。

蓋を開ければ必要最小限の労力で事が済んだのだ。徒労を感じるものの、喜ばしいことではある。

とはいえ、これで全て終わった訳ではない。元凶である男の始末はついても、この男がやらかした諸々の後始末はこれからだった。そのことを考えると頭が痛い。

帝国軍、国連軍共に甚大な被害を被り、その影響は対BETA防衛ラインに対しても確実に波及するだろう。また派遣していた自分の直属であるA-01も壊滅し人員の損失が酷かった。

暗いニュースばかりしかない状況である。唯一の朗報と言えば目の前のマシンを手に入れられたことか。

「価値を考えれば、それほど損な結果という訳ではないかもしれ
ないわね」

夕呼は気持ちを入れ替え、周辺の人員に指示を出し始めた。

この場での最上位の責任者である夕呼が動かなければ、場は停滞したままである。

「司令に連絡してちょうだい。犯人は射殺、第一級警戒態勢は解除して。配置についてた狙撃班も戻して。整備班はアンノウンを地下のドッグへ運んで頂戴、場所についてはドッグの人員から指示を受けて。三班から五班の人間は用意しておいた仕掛けを解除するよう。それからその男の身体を、誰か監察医のところへ搬出して調査するように命令を」

「……………誰を、運ぶって？ あアツ！？」

矢継ぎ早に指示を出していた夕呼の耳に、聞こえる筈のない声が入った。

ツハと振り返ると、そこには射殺した筈の男が身を起こして立ち上がるうとしていた。

死んでいる筈の男が生き返っている姿を見て、格納庫の中の空気が騒然となる。

「そんな、あり得ないわ！？ 確かに頭に命中した筈！？」

「ああそうだ。確かに当たったな俺の頭に。お陰さまで意識がぶっ飛んだ。今もガンガンしゃがる。で？ それでどうした？ 死んだとでも思ったか？ ハハッ！ お目出度い頭をしてやがるなあオイ！！！」

僅かにふらついていたものの、男はしっかりとした様子で立ち、夕呼を殺意に満ちた視線で睨みつけている。

その銃弾が当たった筈のこめかみからは今も血が流れていたが、しかしそれだけだった。狙撃銃で一撃もらっている筈にもかかわらず、”ただ出血しているだけで済んでいる”。
”どんな奇跡が起こったのか。それを考える暇もなく、夕呼へ向かって男が走りだした。

「副司令！ 後ろへ下がってください！！」

「邪魔だこの雑魚が、下っ端は黙って消えてるや！！」

護衛が素早く動き、夕呼と男の間に立ち塞がる。男は護衛に向かって怒鳴り付けるや否や、一気に加速して踏み込む。

関節を極めるため掴んできた護衛を、逆に男は尋常ではない怪力を発揮して引つ張り、護衛が態勢を崩した瞬間に空いた手の方を使い、全力でその頭を殴り飛ばす。

そのパンチ一発で、ゴキヤと護衛の首がへし折れ頭が回った。

護衛の死体を無造作に捨て投げ、男は夕呼へと疾走する。

「貴様！」

「邪魔だつつつてんだろうが木偶の坊が！！」

残った護衛たちが立ち塞がるも、男は全く意に介さない。

体格の違う護衛が相手にも関わらず一方的に力勝負で押し勝ち、蹴り一つで内臓を破裂させパンチ一つで骨を砕く。

4人の護衛が一気に立ち向かって来たものの、その内接近戦を挑んできた3人はあつという間に殺害されていた。

最後の一人は懐から拳銃を取り出し、男へと向けた。警告などせず、狙いを付けると同時に護衛は引き金を引く。銃弾が放たれ、それは真つ直ぐに男の額へと着弾した。

しかし、軽くのけ反るだけで男はすぐに態勢を戻し、煮え滾った視線で撃った護衛を射抜く。

「撃ちやがったな、このクソ野郎が！」

「ば、化け物ツ……!？」

言い切る前に、護衛の喉を男の拳が打ち潰した。

邪魔な護衛を全員仕留めたことを確認するや否や、男は夕呼を追い走った。

護衛全員が敗れるのを確認する前に夕呼も逃げるべく走り出したのだが、彼女自身は決して軍人でもない、ひ弱な研究者であった。

護衛たちが時間を稼ぐ暇もなくやられたこともあって、逃げ切る前に男に追い付かれ、腕を掴まれた。

掴まれた腕を引かれ、そのまま床に倒され押し付けられた。

「ッ　　ぐう!？」

「どうした？　顔を床に押し付けられて悔しいか？　下だと思っていた人間に反撃を食らって屈辱的か？　ええおいどうしたんだよ、答えてみるやツ!？」

「あ、ぐ、くう………ふ、ふん。プライドばかりでかくて、頭の足りてない男、ね。女相手に、手を上げなきゃ自分の優位を保てない、なんてね………」

「ご高説どうもありがとうございます。こんな状態にもなって凄いなアンタ。そんなアンタにプレゼント、だ！」

「ッ!? ぐううッッ!!」

男は夕呼を頭の上から押さえつけてやってる手に体重をかけてやり、捻り上げてる右手をさらに関節の反対方向へ進めてやる。

折れる限界まで遠慮なしに力を加えられ、夕呼が逃れようのない苦痛に声を上げる。それでも屈服しない目を崩さないのだから大したものだった。

と、銃声が響き男の顔が弾かれた。男の頬に一筋の赤い痣が残る。

男が夕呼を抑えつけたまま、感情のこもらない目で銃声の聞こえた方向に顔を向ける。

見ればそこには、拳銃をこちらに向けて構えている兵士の姿があった。銃口から撃ったばかりだということを示す硝煙が出ている。

銃撃を受けながら傷らしい傷もない男の様子に、不自然な表情を浮かべたまま硬直してる兵士を尻目に、男はまた別の兵士へ顔を向け声をかけた。

「おい。そこのお前。ぼさつと突っ立っているお前だよ」

「……………何だ?」

「命令だ。そこ俺を撃つた馬鹿を殺せ」

「な!?!」

「命令を聞かなけりゃこの女を殺す。分かつたら早くやれ」

無感情に告げる男の命令に、言われた兵士は動揺するも動かない。当然である。何故敵である奴の命令を聞かなければならない?

それに何より、命令内容が仲間を殺せという。従える訳がない。

混乱もあつたが、常識的判断として唯々諾々と従える筈がなつた。男は何時までも経つても動かない兵士の様子を見ると、無表情なまま視線を夕呼へと戻す。

そして躊躇なく、捻り上げていた腕をへし折つた。

「ツ、アアアアアー……ッ！？」

「き、貴様！ 副司令によくも……！」

「逆上してんじゃねえよ、くそが。お前の責任だろうが」コレ”
は？。」

「な、何を言っている！？」

「俺は言つたよな？ その俺を撃つた馬鹿を殺せと。殺さなきゃこの女を殺すと。なのにお前は動かなかつた。これはつまり、テメエがこいつよりもそつちの馬鹿を選んだってことだろうが？ あ？ 違うか？」

「ふ、ふざけるなアツツ！！ そんなデタラメな理屈があつてたまるか！！ そもそも貴様が副司令を捕え害してるのだろうが！ 責任転嫁も甚だしい……！」

激昂し反論する兵士の言葉を受けながら、男は馬耳東風な様子で何ら動じていなかった。

一通り言葉を吐き出し落ち着いて来たのだろう兵士の姿を見て、男が口を開く。

「で、話は終わりか？」

「ッ……お前は！」

「ごちゃごちゃごちゃごちゃ五月蠅い奴め。テメエは全然自分の立場って奴を分かってないな………つたくよー」

男は腕をへし折り自由となった片手を、夕呼の首に当ててやりながら言った。

「ラストチャンスだ、俺を撃つた馬鹿を殺せ。従わなけりや即、コウヅキユウコは殺す。仏の心も何もなしだ。口応えも何も許さない。俺の命令に反した判断した瞬間にこいつの首をへし折って潰す」

「ッ
……！」

命令を受けた兵士は文句を言おうとした口を閉じ、顔を青褪めて沈黙した。

男の視線を受けて、だらだらと嫌な汗が流れ始める。本気だと言うことを理解し、そしてあまりにも予期せぬ重大な選択を強いられることに気が付いたがゆえに。

命令に従い仲間を殺す？ 馬鹿な。何故テロリストの要求を受けて味方を撃たなければならぬ。あまりにも馬鹿げている。迷う余地すらない選択である。

しかし、殺さなければ殺されるのは香月夕呼である。この横浜基地の副司令であり、噂に曰くある極秘計画の重要人物だとも聞く。この真実はどうあれ、どちらにしろ兵士にしてみれば天上の階級の人間であり、少なくとも標的にされてる兵士よりも重要度は断然に上である。どちらを生かすかで選ぶのならば、問答無用で選ぶべき人物だ。

迷う。迷わざるを得ない。どちらを選んでも死が兵士に待っている。仲間をその手で殺すか、VIPを見殺すかの二つが。

選ばなければそれはそれで夕呼の死を招く。決断には時間制限があった。それがなおさら兵士の心にプレッシャーを加え、平常心を奪い去っていく。

勿論悪いのは目の前の男に決まっている。それは疑う余地はない。しかしこの場で選択を任されているのは兵士であり、その選択の責任を負うのは兵士自身だ。そうでないと言ったところで、本人や今周りで目撃している人間はそうは思いはしない。

緊張に激しく脈打ち、呼吸が息切れしている兵士へ男が声をかける。

「何をそんなに迷ってるんだ？ 答えなんか最初から一つだけだろうが」

「ひ……一つ、だけ？」

「たかが一介の一兵士の命と、この女の命。どっちの方が重いかなんて明白だろうが？ 違うか？ お前だってそう思ってるんだろうがよ」

「だ……だが、しかし……」

「しかしもかかしもねえだろ、オイ。その馬鹿は死んだところで幾らでも代わりがいる。つまり今ここで死のうが、なーんの影響もないってことだ。対してどうだ？ コウヅキヨウコの場合だとどうなる？ この女に代わりなんかいねえだろ。それどころかこいつが死んだ時点で、即オルタネイティブ計画は終了だ。分かっただろ？ この女とその馬鹿とじゃ、命の価値に天と地ほどの落差があるってことをよ」

男の言葉はさながら悪魔の誘惑だった。甘言を振るい墮落と破滅の道へと誘う、許されざる魅惑である。しかしそう分かりながら、逆らい難き引力があった。

平常心を失った兵士の心に、するりするりと男の言葉が説得力を持って入ってくる。

そこに追い打ちをかけるように男が言った。

「それ見ろよ。コウヅキユウコもそうしろって言ってるぜ？」

兵士が男の言葉に反応し、夕呼を見る。

夕呼は片腕を折られた激痛に苛まされ、半ば意識を失っている状態であった。しかしそんな状態でありながら男に対する反骨心があったのか、気の強い表情を残し片目を辛うじて開いていた。

意地だけでその表情を保っていた夕呼には、男と兵士の会話なんて聞こえてはいなかったんだろう。しかしそのことは追い詰められていた兵士に分かる筈もなく、夕呼のこちらを見る目を見て、”私を選びなさい”と言っているように彼は思った。

均衡を保っていた心が、傾く。兵士は自分の拳銃を取り出し、震える手つきで銃口を指示された味方へと向けていく。

その光景を、男を撃った兵士は蒼白に染まった表情で見つめていた。がちがちと歯が震え、信じられないものを見るような視線で自分を狙う銃口を見ている。

彼だけではない。計らずとも観衆となった周りの人員たち全員が、その様子を見ていた。

カタカタと銃口が細かく揺れながらも、狙いは付けられたままだった。準備が整った様子を見て、男が命ずる。

「撃て」

パンと、乾いた音が鳴った。しかし銃弾は当たらず、弾丸は何もない壁を削った。

銃口の震えが狙いを外したのだ。狙われた兵士がぺたりと尻を付ける。腰が抜けたようだった。

「もう一度だ。今度はちゃんと当てろ」

息つく間もなく命じられ、ヒュツと息をのみ兵士は銃を向ける。

一度撃たれて緊張が解かれたのか、全身を震わせながら狙われる兵士が口を開いた。

「た、助けてくれ。お願いだ。う……撃たないでくれ。こ、子供がいるんだ……」

「ほざくなよゴミ。お前がやったことを覚えているか？ 人のことをあつさり撃つたくせに、自分が撃たれるときになって嫌ってか？ ツハ、笑わせるなよ」

男の言葉に、ただひたすらに助けてくれと念仏のように言い続ける兵士。

それに何の感慨も抱かず、男は断言する。

「撃て」

パンと再度同じ音が響き、呟き続けていた兵士の声が途切れた。仰向けに倒れ、血だまりが徐々に広がっていく。

仲間を射殺した兵士が、銃を取り落としてその場に崩れ落ちた。頭を両手で抱えてぶつぶつと独り言をつぶやき続けている。

その兵士に向かって男は言った。

甲高い夕呼の悲鳴が響いた。喧騒が響いていた格納庫の中があつたという間に静まり返る。

そもそも何故、兵士が男の命令を受けて仲間を射殺する羽目になったのか？ 男の手に香月夕呼というVIPの命が握られていたからのだということ、この奴らは忘れてでもいたのだろうか？

まあ真相は何であれ、男の行動によりその事実を改めて思い出されたのだが。

男は自分が殺しを命じた兵士に、最初に怒声をかけた兵士を指差しながら告げた。

「あいつもだ、殺せ」

「……………」

兵士は、もう口応えも何もしなかった。

無反応のままノロノロと落とした銃を広い、指示された兵士へ銃口を向ける。

「よ、止せ」

パンと音が鳴り、人の倒れる残響が残る。

さつきまであった熱気は消え失せて、この場にはただ冷やかな静けさだけが残っていた。

周りを見渡し、男は改めて命令を言った。

「さつさと俺を狙撃しやがった奴をここに連れて来い。5分以内だ。守らなかつた場合はどうなるか……今更言う必要はないよなあ、あア？」

その数分後、格納庫の中には一発に銃声と人の倒れる音が響いた。

医務室で目覚めた夕呼は、報告書を読み自分が捕まってから起きたことについての顛末を知り、怒りと共に報告書を握り潰した。

「人の命を盾にとって殺人強要？ ふざけんじゃないわよ！！
結局は自分の感情優先して動いてる、力にのぼせあがっているガキの癖に！！」

夕呼の折られた右手はギブスが巻かれ、左手の小指にも包帯が巻かれている。

医務室のベッドの上に横になりながら、夕呼は憎々しくも今の事態を招いた元凶である男に対して遠慮のない苛立ちをぶつけていた。そのベッドの横には、夕呼の秘書官であるピアティフ中尉が報告を携え佇んでいる。

「ピアティフ！ それでこのチンピラは今どうしているの！？
まさか素直に独房に放り込んである訳じゃないでしょ！？ あのままマシンにでも乗って他国に逃亡でもした！？」

「はい……それが、その後彼は滞在する部屋を要求してきて。現

在はこちらが用意した部屋で休息している筈です」

「はあ！？ 休息！？ 何それ？ 正気？ いえ、やっぱりいい答えなくても。そうね……元から正気なんてなかったわねアイツに。報告書を見る限り、何処までも即物的で自分の感情を優先して従うのが行動原理のようだし」

「部屋には監視機器と、入口付近には常に武装した者を配置します。一応必要になれば強化外骨格を着た兵士を投入して即時制圧することも可能な態勢ですが、動かしますか？」

「いいえ、それはまだよ。狙撃銃で撃たれていながらアイツは平気だった上に、生身の人間とは思えない力を発揮してる。まさかさすがに強化外骨格やロケットランチャー相手に無傷でいられるとは思わないけれど、そのあたりを調べてから事に当たらないと、どんなしっぺ返しを食らうか分かったもんじゃないわ。幸い向こうから大人しくこっちの檻の中に入れてくれるっていうのなら、それを利用してさせてもらいましょう。ただし、アイツが勝手に動こうとしたら容赦する必要はないわ。使えるものは全部使って仕留めなさい」

「了解しました。監視してる部隊に指示を出しておきます」

険しく眉を寄せながら分析し、指示を出す夕呼。

時折顔をしかめるのは、自由にならない腕の存在に苛立つからだろ。医療技術はこの数十年間の間に飛躍的に発展してる分野なので、ただの骨折程度は一週間程度で治るが。

「霞はいる？」

「……………はい」

ベッドの陰から返事が届き、思わず夕呼が振り返る。

視界の陰になっているところから物静かに、儂げな印象のロシア系少女が出てくる。その頭にはウサミミを模したヘアバンドが付いていて、ひよこひよここと動いていた。

夕呼が保護者となって預かっている少女、社霞である。彼女へ夕呼は問いかける

「例のアイツについて、もう知っているわね？ リーディングはしてみたかしら？」

「……………はい」

物憂げな表情のまま、霞がうなずく。その様子に夕呼は疑問を覚える。

普段から言葉の少ない娘ではあるが、今の様子はそれとは若干異なるように見えたのだ。

「なにかあったのかしら？」

「いえ……………ただ、あの人の心の中を見て」

「感化を受けるようなものがあつたと？」

リーディングでもたらされるだろう悪影響を予想し、問いかける。人の心を読む以上、正視し難い嫌なものを見ることはある。幼い感性のものがそんなものを見れば人格に何かしらの影響を与えることもあるだろう。

とはいえそれは誰でも予想できる問題なため、当然リーディング能力者である霞たちには少なからず、そういった事柄に対しての耐

性訓練を受けている筈だが。

「いえ……………大丈夫です。ただ、あの人の心を読んだ時に”後悔”がなかったのが気になって……………」

「後悔が、ない？ 自分のやったことに対して？」

こくりと霞がうなずく。ふんと夕呼は頷き、判断材料の一つとして考える。

人間の精神というのは、色々な種類の感情などが組み上がったバランスの上に成り立っている。偏りはあるうが、そこに人による有無の差などはない筈である。誰でも全ての種類の感情のタネを持っているのだ。

対してあの男の心には霞曰く、後悔が全くないらしい。事実だとしたらバランスが偏っているという話ではなく、常人と比べて明確に精神に障害が発生しているのだろう。

「精神障害者ね……………なるほど。生粋のものかは知らないけど、それなら納得できるわ。あの異常な行動原理は、そのまま精神の異常に根ざすものだったからってことね……………それで、他には何か分かったことはないかしら？ アイツの機体の由来についてや正体は？」

とりあえずは納得し、他の気になる情報について問い質す。

霞はその夕呼の尋ねに、手元のスケッチブックを差し出した。

夕呼は差し出されたスケッチブックを受け取って手に取り、パラパラと内容を確認していく。

「【神様のゲーム】、【初めに選ぶ特典の選択】、【コウツキウコが重要人物】、【経験値をためる必要がある】、【オルタネイティブ計画は横浜基地で行われている】、【目的達成のための都合

のよい手足】、【国連も帝国も全部達成すべき夢のための踏み台】
……これが全部、アイツの頭から読み取った内容なのよね？」

「……………はい」

霞の相槌を受けて、夕呼はため息を漏らしてスケッチブックの中身をみる。

「もしこの内容が本当なのだとしたら、あいつは神様からあのマシンを受け取り、オルタネイティブ計画について知り、そして娯楽同然の考えで今後ともその力を振るうつもりでいることになるわね。しかもどいつこいつも、全員使い潰す捨て駒同然に見ていると」

もはや馬鹿だと言うことすらアホらしくなってくる結果である。典型的な妄想症である。しかも厄介なことは別にこれが正しかるうが正しくなかるうが、周りの人間には関係ないってことである。嘘でも本当でも、当人がそう信じ込み行動することに変わりはないのだ。危険思考の異常者が手に負えない力を好きに振り回すのである。

そして一番厄介なことは、リーディングが通用しないということである。こういった妄想症の人間は、自分の妄想を真実だと自分で信じ込んでいるのだ。そんな人間にリーディングを使っても、芳しい成果は上がらない。つまりあの尋常を絶する力の出所について、リーディングで探りを入れることは無理だと言うことである。

「地道に調査して調べるしかないってことね。まあ仕方がないわね」

「そう言えば副司令、申し訳ありません。伝え忘れていたことがありました」

「ん？ 何かしら？」

夕呼の下へピアティフが戻ってきて言った言葉に、夕呼が問い返す。

ピアティフは若干言いくさそうに迷ったものの、結局は素直に報告を始めた。

「例の彼についてですが、本人が伝えるように言った伝言の中に”コウツキユウコが目覚めたら真つ先に話をさせる”というものがあります。いかがいたしましょうか？」

「ふーん……そう。分かったわ。そうね……いいわ、会ってやるわよ。ここまで人を馬鹿にしたアイツの度胸に免じてね」

「しかし副司令！ 彼と対面するのは危険です……！」

「分かっているわよ。誰も直接顔を合わせようだなんて思っぢゃいないわ。向こうの部屋にカメラなりテレビなり用意してくれればいいわ。それに、何も今すぐ会おうって気はないわ。こちらアイツがやってくれたことのお陰で仕事が溜まりに溜まっているんだから。わざわざ相手の言う通り、目が覚めてすぐ会談してやる義理なんてないわね。せいぜい向こうには”私が目覚めるまで”、大人しく待っていてもらいましょうか」

「了解しました。ではその方向で手筈を進めておきます」

「頼んだわよピアティフ。私はちょっと疲れたから眠らせてもらおうわ」

「お気を付けて。ゆっくりお休みください」

ピアティフが一礼し、静かに病室を出ていく。その後ろに霞もまたついていき、退室間際にペこりと夕呼に頭を下げていった。

ちよいちよいと左手を振ってやって見送り、夕呼はベッドに身を倒して息を吐く。

そしてふと寝ようとした時、視界にスケッチブックが目に入った。開きっぱなしのページには抜き出された言葉が綴られており、その内の一節を見て夕呼は吐き捨てるように言った。

「【所詮は作りもの世界が舞台】、ね……………冗談じゃないわ」

夕呼が男と面会したのは、結局目が覚めてから5日後のことであった。

左手の小指の骨折が治り、右手の骨折もあと数日の内にギブスが取れるという状態である。とはいえ、体調は完全という訳ではない。この5日間の間、男がやった暴拳の後始末に忙殺されていたからだ。子飼いの部隊であるA-01にしても、壊滅状態に陥ってるのをどうにか手配し処置をしなければならなかった。

お陰さまで碌に睡眠時間もないため、非常に不健全な状態である。

「準備は出来てるわね？ それじゃ始めてちょうだい」

若干険しい目つきで、スタッフに命じて始めさせる。

連日の疲労がありながら、しかしその程度の状態だけしか露出しないよう努めているのは夕呼の努力の賜物だった。僅かでも弱味になる姿を見せまいとする、才女ゆえの強さだった。

夕呼の目の前に置かれてるテレビの画面に電源が入り、向こう側の様子が映し出される。

現れたのは5日前、憎々しくも大暴れし夕呼の腕を折ってくれたあの男の姿だった。

『よう、コウヅキユウコさんよ。元気にしてたか？ 人の命令を無視して随分と待たしてくれやがって。まあ、それなりにゆっくりさせてもらったから、特別に許してやるがな』

「良く言うわね。普通じゃ出来ないような贅沢をしておきながら嫌味を隠そうともせず夕呼は言う。この5日間、目の前の男は三食全てをよりにもよって天然食料を要求して食べていた。

最初の初日に出た合成食品による御膳を食べるや否や怒りを示し、怒りのままに暴れて監視の兵数人を行動不能にしたのだ。以来無用なトラブルを避けるために、わざわざ貴重で高級な天然食料を用意し男に食わしてやってるのだ。そこらの高官ですら出来ない贅沢である。

『はあ？ 何言ってるやがる。ジャンクフードの方が万倍もマシな食い物を持つてくる方が悪いだろうが。そもそも俺を何だと思ってるんだ？ あんなゴミを食ってる奴らと同じ価値だとも思ってるのか？ 見当違いにも程があるぜ』

「そこまで突き抜けると、逆にどうやったらそこまで傲慢になれるのかいっそ気になって来るわね。それで、元々はアンタからの希

望だったわよね。単刀直入に聞かせてもらっけど、何を話すつもり？」

『別にそうおかしな話をするつもりはねーよ。再通告だ。この俺の要求を飲んで手を組まないか？ っていうな』

「へえ？ 以外ね。一度拒否されときながら、アンタが同じ話を持ちかけるなんて。別にどの陣営に着こうが執着はないんじゃないかな？ たかしら？」

今までの行動パターンを振り返れば、相手が自分の意に沿わぬ行動をした場合力任せに叩き潰すのが目の前の男の習慣だった。

それがどういった訳か、自らの行動原理を翻し再提案している。ただの気紛れにしても、理由が知りたいところであった。

『いやなに、俺なりに考えてやったのさ。思うにだ、最初に俺の提案を蹴ったのはお前らがあまりにも無知だったからじゃないのか？ ってな。テメエが言ってた、マジンガーZの価値であって俺の価値じゃないって台詞自体が、実際にテメエらの浅はかさを証明してるしな。ならこっちとしても度量の大きさを示してやろうじゃないかと思ってやった訳だ』

「そう、それはどーも……………」

抗弁する気すら失せてくる会話だった。根本的に自分が絶対的上位者だということ疑っていかない発言である。

頼みの綱であるマシン リーディングで判明した名称である
マジンガーZ から離され、外には何人も武力制圧を行う人員が配置されてるといふのに。

命を握られている立場にもかかわらず、男は逆に自分が命を握っ

ているのだという態度であった。

「やっぱり、付き合ってられないわね。どんな話をするかと思っ
て話してみたけど。無駄足か」

『あア？ ……………何だ。もしかして、デメエは学習能力のない馬
鹿か？ ああ、それとも実は宝石の価値すら分からない節穴だった
のか？』

「節穴？ おあいにくさま、目が腐ってるのはアンタの方よ。今
のアンタを受け入れても、私にはメリット以上にメリットしか生
まれないわ」

『は？ デメリット？ 何それ？ この俺の価値よりも損するよ
うなデメリットがあるってか？ ギャハハハ！ そりゃ面白い話だ
な！？』

まるつきり信じちゃいない様子で、夕呼の話を笑い飛ばす男。ど
んな不利益よりも自身の価値の方が上回ると心底確信しているよう
である。

確かに、それは一面としては間違っではない。それだけの規格
外の力を男は示して見せた。短絡的で幼稚な考えに従った計画だろ
うが、世の中には武力外交というものだってある。理屈としては男
の”売り込み方法”もそう間違っではない。

しかしそれは、強力な戦力を求めている場合の話だった。

「分からない？ アンタはね、やり過ぎたのよ。派手なデモン
ストレーションをやってしまったの。許される範囲を逸脱してね」

『……………どういうことだ？』

「新潟上陸から始まる、横浜基地までの侵攻劇。その間にアンタ、いったいどれだけの被害を出したと思ってるの？ 帝国軍が用意していた新潟の対佐渡島BETA警戒網に、近隣の駐屯部隊から抽出された増援。おまけに国連軍の防衛部隊まで、参戦したおおよそ全ての戦力を全部軒並み撃破。参加した部隊の損耗率は報告される数値上だけで70%越え。おまけにわざわざ念入りに残存部隊への追撃を行ってくれたお陰で、死傷者の数も想像以上。分かる？ これって実質、極東方面における対BETA防衛ラインに穴が出来るってことよ？」

『ふーん、なるほど。で？ だからどーなるんだ？』

「恨みを買って過ぎてるって言うてんのよ。アンタのやったことでお偉いさんたちはみんな大騒ぎしてるのわ。この話は帝国だけで済む問題ではないの。極東におけるBETAに対する防波堤の役割を果たしている帝国が潰れるのは、他の国にとっても看過できない問題であるの。特に米国なんかはその筆頭。穴を埋めるための戦力を派遣しようとするのは企み、介入を嫌う帝国側の高官たちがそれを拒否するために喧々諤々の騒動を引き起こしてる始末。アンタを受け入れるってことはね、そういう奴らの敵意も一緒に抱え込むってことになるのよ。論外だわそんなもの。リスクとメリットが全く釣り合わない」

『はあ？ 俺という最強の力を手に入れるよりも、んな有象無象な奴らとの関係が悪化する方が惜しいと？ お前それ正気で言ってるのか？』

正気を疑う目で男が夕呼を見る。

何を当たり前のことを言っているのかと、逆に見つめ返しながら

夕呼が喋る。

「当然でしょうが。そもそもアンタ、私の目的が何か知っているかしら？ 私はあくまでもオルタネイティブ計画の責任者であり、手足としての戦力は必要でも反抗する勢力を叩き潰す力なんて求めていないわ。それが自由に動かない、自分勝手な手駒ならなおさらね。あくまでも交渉のカードの一つとしてしか私はアンタには価値を見出していないし、それ以上のデメリットがあるのなら求める気なんてさらさらないわ」

それが夕呼と男の双方の狙いの相違点だった。オルタネイティブ計画の完遂を望む夕呼にとって、関係各所との繋がりに支障をきたすだろう男の価値は固守するほどのものではない。

軍をも物ともしない強さに価値を見出している男に対して、そこまで同調などできやしないのである。そうでなければオルタネイティブ4などという計画に参加などしていない。

夕呼の目標を達成するためには、今後ともあらゆる勢力との交渉が必要となることが明白であり、そのために余計な弱味とも成り得る男の存在など不要だった。

『何だ？ お前はあのBETAとかいう化け物を全滅させるための研究をしてるんじゃないやなかったのか？』

男が怪訝そうな表情を浮かべて夕呼を見る。何か考え違いでもあつたような様子だった。

それを見て夕呼はリーディングの結果を思い浮かべる。目の前の男はオルタネイティブ計画を単純に、BETAを殲滅するためのものだと考えていたのであつた。

大筋では間違っていないのだろうが、甚だしい勘違いである。当然のことながら00ユニットのことはおろか、オルタネイティブ

計画の来歴すら知っていないのだ。

その程度の認識しか持たずにこんな大騒動を起こしてくれたのだから、つくづく度し難い。夕呼は心底そう思う。

「そうね、それは確かに間違っではない認識かもね。でも残念ながら、私の研究はそんなアンタに分かり易く直接どうこうするよくな代物じゃないの。そもそも、BETAと何も考えず切った張ったしてどうにか出来るとも思っているの？ だとしたらお目出度い思考にも程があるわ。もっと現実を知ってから出直してくることね」

「……………ああ、そうか！ なるほどなるほど、ようやく分かったぜ。テメエらのその的外れな頭の原因がよ」

「？ 今更何よ？ 何か言いたいことでも思い付いたの？」

そろそろ会話を打ち切り、万全の用意をしている制圧部隊を動かそうかと思っていた時に男が喋り始めた。

納得がいったとでも言わんばかりに頷きながら、男が言う。

『よーするに、テメエらはまだ俺の力を見くびっているってことだろ？ あんだけ散々軍隊をぶっ潰してやったのに、全然俺の力の正当な評価が下せないってわけだ！ BETAがどうにか出来る筈がない？ アホか！？ テメエら雑魚どもの限界と俺の力を同一視してんじゃねーよ！！ ギャハハハハハ！！！！』

「……………随分と好き勝手言ってくれるじゃない。それじゃなに？ アンタはBETAを倒せるとも？ 生言っでんじやないわよ青二才が。言っとくけどね、そこらの地上でさまよってるBETAの群れの一つや二つ潰せたところで何の意味もないのよ？ アンタが

言うように絶対的な価値を示したいって言うならね、それこそ一人でハイヴでも落としてこなきゃ話にならないわ。そこんとこ分かってるアンタ？」

『ツハ！　ならそのハイヴを潰してやるよ。お前の言った通り、俺一人だな』

夕呼の挑発的言動にそのまま流れるように従い、男が宣言する。ニヤニヤと嗤いながらも、夕呼を見るその目は揺らぐが、本気だと見て取れた。

ハイヴ攻略。それがどういった意味の言葉なのか目の前の男は理解しているのだろうか？　しかも単機で成し遂げるのだと。

夕呼の目が窄まり男を見る。

「それ、本気で言ってるの？　いい加減戯言に付き合ってる気はないんだけど？」

『論より証拠だ。見せてやるよコウツキユウコ。どこまで行っても動きの鈍いうすらトンカチなテムエらの頭に、はっきりと分かるように俺の力を刻みつけてやるぜ』

男が立ち上がり、画面からフェードアウトする。

そのままテレビから姿を消しながら、声だけが響く。

『さつさと案内しやがれコウツキユウコ！　マジンガーZのところへな！！　どうせ出来もしない解析なり調査なりやってんだろ？　無駄な努力をご苦労なことだ！！』

「どこまでの人の神経を逆撫でする奴ねッ」

「……………どうでしょうか？」

カメラに映らない場所でこれまで待機していたピアティフが、夕呼へ問いかける。

言うまでもなく男への対応についてだろう。このまま向こうの要求通りにマジンガーZの下まで誘導するのだろうか？

苦々しい表情を隠さず夕呼はピアティフへ尋ねる。

「あの機体の調査状況については、やっぱり変わらず？」

「はい。非常に堅牢な装甲材質であるらしく、分解を試みたものの一切の熱変化、衝撃、切削といった外部加工が通じず、内部構造については不明。解放されているコックピット部分を調べて見たもの、コンソール基盤なども同質の素材であるらしく同じく解析不能だとまたどれだけ操作しても機体は起動せず、何らかのセイフティがかかっているのではないかと報告を受けています」

「うち……………原理は知らないけど、アイツ自身があの機体の制御装置を兼ねているってことか。アイツ以外の人間が触れても機体は動かないし、おまけに強固な特殊素材で作られているお陰で分解調査もできない。全く、とんだ機密保持の仕方もあったものね、こんな非常識な手法で情報を守るなんて。整備も修理も出来ない、機体丸ごと一品モノの使い捨て扱いとは。お陰で爆弾の一つも仕込めやしない」

「一応、パイロットシート付近に少なくともスペースが確認されたので、隠れて小型の爆弾を設置することも出来そうですが？」

「いえ、おそらく意味がないからいいわ。アイツの謎の身体能力の事を考えると、万全なものとは言えない。不確定なリスクを負う

ぐらいなら放置した方がマシだわ」

「了解しました。しかし、それではこの件についていったいどのような対処を？」

ピアティフの問いに、夕呼は少し考えた末に結論を出した。

「いいわ、やらせてやりましょう。勝手に死んでくれるっていうなら好都合よ。あの機体の技術や情報は惜しいものの、無理して懐に置いておくにはあの男は危険過ぎるし、厄介が多いわ。せいぜいあの戦力でハイヴで大暴れしてくれるっていうなら、それを利用させてもらうことにするとしましょう。アイツを機体のところに案内した後、素直に地上に出しちゃって。関係各所に通達し、混乱のないようにハイヴまでの道のりをエスコートするように。それから帝国にもこの情報を。約2時間後に、佐渡島ハイヴで大きなドンパチが起こるって送っておいて。戦力を消耗してる今、ハイヴのBETAを間引き出来るチャンスは向こうにとっても丁度良い機会でしょう。あわよくばアイツの機体の残骸でも回収できればいいけど………それは高望みのし過ぎか」

即座に考えをまとめ、加えて帝国に対しても恩を売り付ける算段を立てる。

色々と粗が目立つ点もあるだろうが、まあそのあたりは交渉次第である。話の通じない異常者相手に話すのと比べれば、まだ海千山千の狸たちとしのぎを削り合う方が気が楽である。

夕呼のゴーサインを確認し、言われた通りの手配が実行される。

それから10分後。横浜基地から一体のマシンが発進した。

つい先日、帝国・国連の両軍に対して甚大な被害を与えたアンノウン 鉄の城マシンガーZが、己が辿って来た道のりを遡って

走り始めたのだ。

目的地は自らが最初に降り立った地。極東最前線にしてBETAの日本侵攻の最前線、佐渡島ハイヴだった。

ざばりと海面から巨大な鉄の腕が現れ、大地を掴んだ。

続けて巨人の全身　　マジンガーZの姿が海面から現れ、ゆっくりと上陸を果たす。

新潟から海に飛び込み、海中を潜航することおおよそ1時間。夕呼の言った通り2時間ほどの時間で彼は佐渡島へ到着していた。

何の妨害も寄り道もしなければ、マジンガーZは地上を時速360kmで疾走し、水中を20ノットで航行できるのである。例えば途中余計な障害物があるうとも、その有り余る馬力で文字通り飛び越えて進めるために、この程度の時間で辿り付けるのは自明の理であった。

「さて、ハイブって奴はどこにあるか………ナビを見るに、あっちの方が」

キャノピーに浮かぶ陳腐なナビの矢印に従い、男はマジンガーZを走らせる。

あつという間に上下の激しい地形を飛び越えていくと、目の前に丸剥げた大地が写る。

地形の起伏すら均されたBETAによる蹂躪後を、逆に走り易い

と評しながら走ること数分。

男の目に特徴的な構造の物体が見えた。

まるで何処かの前衛芸術家を作った作品のような、何処か人間の感性から外れたデザインをした物体。ハイヴの上部に構築される、モニュメントとよばれるBETAの施設である。

それと同時に、これまで偶然接触していなかったBETAたちがついに男の前に立ち塞がり始める。

もつとも衛士を食い殺している戦車級に、大型の要撃級や突撃級。それ以外にも続々と地面が盛り上がるや否や、マジンガーZに反応してBETAの増援が姿を現していく。

その次々と湧き出てくる怖気の走る異形たちの姿を認め、歯を剥き出して男が晒す。

「たかがこの程度の数で止められると思ってんのかよ？ この俺とマジンガーZをよオ？ いい加減学習しろよなこの化け物どもが！！」

疾走するマジンガーZを止めることなく、その勢いを維持したまま向かってくるBETAの群れへと突っ込む。

ぶつかる直前にジャンプし、マジンガーZは飛ぶ。重量以上に馬力の有り余ってるマジンガーZは自力のジャンプだけで、人間のスケール比に合わせて楽に数m以上。実際の高さにして50m以上を飛び上がれることを可能とする。

黒光りする巨大な機械仕掛けの身体が宙で一回転しながらBETAの上を通過し、そして丁度着地点にいた要撃級を踏みつけてさらにまたマジンガーZが飛ぶ。

向かってきたBETAたちを背後へ置き去りにし、そのまま待つことなく全力疾走を再開しマジンガーZはモニュメントに向かう。

「ハハハハ！ 馬鹿が！！ 単純で考えなしだからこうなるんだよ！ 人がテメエらの家に向かって走ってるのに、何で馬鹿正直に向かってくる奴を相手にすると思ってるんだ？ アホが！」

そう嘲笑っている間にも、BETAはどんと姿を現しマジンガーZの進路上を埋めていく。

しかし男は気にする様子もなく、余裕の表情をしたまま叫ぶ。

「ツハ、無駄だっつってんだろっがッ！！」

隙間なく固まったBETAの中に無理やり突っ込んで突破し、最初と同じように踏み台にしてジャンプし飛び越え、全く減速せずにマジンガーZはモニュメントへの疾走を止めない。

無論その間にはBETAからの攻撃はあった。マジンガーZの全身には絶えず赤黒い戦車級が纏わり付いていたし、見晴らしの良い空間でジャンプした時には光線級のレーザーで狙い撃ちにされた。要撃級や突撃級の攻撃なぞ幾度となくマジンガーのボディに直撃している。

しかし、効かない。マジンガーZは倒れない。

戦術機が蒸発してしまう威力の光線級のレーザーを受けながら微動だにせず、装甲板を噛み砕く戦車級に関節へ纏わり付かれながら意の介さず動き、モース硬度15以上を誇る要撃級の前腕の攻撃を逆に砕き散らし、快進撃を続ける。

BETAの攻撃の一切が、マジンガーZにダメージを与えていなかった。

「お？ つとつと！」

ふと、着地した瞬間バランスが崩れる。マジンガーZの足がBETAが現れて柔らかくなっていたであろう地盤を貫いてしまい、思

わず動きを止めてしまふ。

その瞬間、隙を見逃さず一気にBETAが殺到した。

大型種が四方八方からおしくらまんじゅうをするかのようにマジンガーを囲み、小型種が足を伝ってボディを這い上がってくる。

「この、うざったい手を使いやがって！」

マジンガーの頭部まで到達しキャノピーを割ろうと近寄った戦車級の一体が、発動した頭部電磁バリアによって阻まれ即死する。

馬力を発揮し振り回すも、次から次へと寄ってたかつてキリがない有様だった。

しつこいBETAの様子に苛立ち、男の怒りのボルテージが上がっていく。

「ぶざけるのもそこまでにしとけよ、このゴミどもが！ いいぜ、そこまで向かって来るってんなら纏めてスコアにしてやるよ！！！」

叩き付けるように腕を動かし、マジンガーに行動を命じる。

「レンジ角設定、出力設定両方とも最大……………纏めて消し飛びやがれ」

マジンガーZの胸部装甲板が輝き、エネルギーが集まる。

両腕を大きく強調するよう上に曲げるポーズを取りながら、男は叫んだ。

「広角プレストファイヤー、発射ア！！」

マジンガーZから、広範囲を射程に収めた凄まじい熱線が放たれた。

マジンガーの正面に位置していたBETAは大型・小型問わずすすべなく焼失し、その背後に控えていたBETA群まで対象に捉え蒸発させていく。全身に貼り付いていた戦車級も、直接浴びずとも放たれる余熱によって次々と引き剥がされる。

そこからさらに機体を、男はブレストファイヤーを照射したままゆっくりと回転させた。

マジンガーを中心に放たれる全方位への熱線照射に、群がっていたBETAたちが次々と同じ道を辿っていく。一回転が終わった時には、視界の中にあれだけいたBETAたちは全て掃討されていた。

「ハハ、俺に反抗するからだ。この低脳な化け物どもめ」

とりあえず一掃したとはいえ、しかしそれで全てが終わった訳ではない。BETAの最大の特徴はその物量である。

気が晴れた男が勝ち誇るその瞬間にも、また新たなBETAが続々と地面から姿を現し始めていた。

男は再度マジンガーZを走らせ、モニUMENTへ向かう。

また同じように群がったものの、一度全てを一掃した分密度が空き、取り囲まれることなく易々とBETA群を突破する。

そして遂に、不気味な造形をしたモニUMENTのすぐ付近へと到達した。

モニUMENTの表面はブレストファイヤーの照射を受けたのか、軽く溶解していた。適当な場所を狙い、男はマジンガーで蹴りを打ち込んでやる。モニUMENTはその蹴り一発でガラガラと碎かれ、マジンガーが通るほどの隙間が開き、その隙間から遙か地下まで通る一直線の穴を男の眼前に晒した。

穴には光が通っておらず、随分と深くまであるようだった。少なくとも今男に見える範囲で穴の底は見えない。

「なるほどな。BETAの巣つてのは地上じゃなくて、地下深くある訳だ。上のはダミーってことか。低脳なりに考えてやがるぜ。けど所詮は馬鹿な生き物か………こうやって、わざわざ巢の中に一直線に通じる道を残してやがるんだからなあ！ ギャハハハ！」

男は迷わずマジンガーを踏み込ませ、底の見えない穴へとマシンを飛び込ませた。

ハイヴの奥深く。深層へとマジンガーZは落ちていった。

2001年1月。帝国軍は先のアンノウンによる武力衝突により、大きな損害を受けていた。

それは極東戦線における対BETA防衛ラインに一時的に穴を空けてしまう程の規模であり、帝国にとっても周辺諸国にとっても見逃せない問題のものだった。

BETA戦線を維持する必要性と帝国へ対する介入するチャンスと見抜き、こぞって様々な国々が自軍の派遣を帝国へ提案し、帝国側はこれを拒否し事態の対処へと忙殺していた。

その中、件のアンノウン侵攻に置いて事態の中心となったであろう横浜基地から、佐渡島ハイヴでのBETAの大規模間引き作戦が提案された。

仮に現状、佐渡島からのBETA侵攻があつた場合、帝国は確実に大損害を被る。

侵攻ルート上アンノウンの被害を直に受けたルートと重なり、まともな迎撃態勢を取れないからだ。

帝国としては現状の佐渡島からの侵攻は、断固として拒絶せねばならない事態だった。そこに佐渡島でのBETAの大規模間引きの提案である。

佐渡島のBETAの数を削り、とりあえずの侵攻のリスクを抑える。帝国としても望むところな作戦だ。

加えて今回、横浜基地側からの働きにより現地に投入してる対BETA兵器の存在があり、帝国側にはそこまで大規模な戦力を出す必要がないと言う。

そして様々な思惑と喧騒のぶつかりがあつたものの、最終的には帝国側はこの横浜基地の提案を受諾。部隊を編成し佐渡島への派遣を決定することとなった。

この編成された部隊が実際に佐渡島へと到着したのは、横浜基地からマジンガーZが出撃してから、およそ4時間弱後のことだった。彼らはすでに先に横浜基地が投入したという新兵器が現地で戦闘しているという情報を持ち、そして戦闘時間の兼ね合いも例の新兵器は撃破されている可能性が高いと判断。任務の一つとして、どれだけ新兵器が戦果を上げたのかの確認と、可能なら新兵器の残骸の回収を課せられていた。

勿論BETAの間引きも任務には含まれていたものの、優先順位は引くかった。

そして彼ら部隊が佐渡島へと上陸し、モニュメントを戦術機のカメラで目視できる位置まで移動した時。

彼らは佐渡島全域から撤退するBETAの姿を確認することになった。

BETAは発砲する彼らに構うことすらなく、次々とハイヴから

沸き出しては佐渡島の外へと一目散に逃げていった。

後に調べられた結果、この時観測された佐渡島から撤退するBETAの数は、10万を楽に超える数がいたという。

そして混乱する彼らを残したまま、やがて佐渡島からは完全にBETAの姿が消えた。

この数時間後。追加で派遣された帝国軍の調査により、佐渡島八イヴの反応炉の破壊を確認。これによって佐渡島における異常なBETAの撤退現象は、反応炉破壊によるものと判明される。

かくして日本帝国の喉元に突き付けられていたBETAの刃は、周辺各所に困惑と謎を残したまま取り除かれ、そうとは知らぬ日本中に歓喜の声を招いたのだった。

そして、それを成した立役者は人知れず横浜基地へと戻っていた。

横浜基地地下に用意された機密区画のドッグに、黒光りする機体が鎮座される。

その頭部のコックピットから飛び降りた男が、機体のボディを足場に降り立ち、無事に地上に着地する。

男の目は眼前にいる女へと向けられ、軽薄な笑みを浮かべたまま言葉を出す。

「さてと、これで俺の力は十分に理解できたよな？ コウヅキ
ウコ」

「……………ええ、理解したわ」

苦々しさを浮かべたまま、夕呼は答える。

佐渡島でのBETAの撤退騒動が起きてから、もう数時間が経過している。

すでにBETAの撤退が確認された時点で一部の面々では原因に当たりを付けられ、つい先ほど裏打ちされる事実が判明したばかりのことである。

夕呼もまた当然確認しており、そして前後関係を見るに、これを成し遂げたのは目の前の傲岸不遜な精神異常者であることに間違いなかった。

「いやはや、思った以上に苦労したぜ。何せ明かりもない地下だったからな。おまけに複雑な迷路になってやがった。ナビはあつても、あれは真つ直ぐにしか目標を目標さないし、途中の障害物なんか全然計算に入れないんで全く役に立ちやしねえ。お陰さまで奴らの巢を潰した後は地上に出れなくて、仕方なく邪魔な壁をぶち抜きながら脱出したからな。そのせいで帰ってくるのにえらい時間がかかった」

やれやれと肩を少なから男は言う。

それだけの苦労をしたにもかかわらず、傍目からはそんなに疲労しているようには見えない。

ハイヴを潰すという快拳を成し遂げていながら、目の前の男はその程度しか消耗していないのだ。

「それじゃコウヅキウコ、聞こうか？」

男がゴキゴキと首を回しながら尋ねる。
リラックスして何でもないかのように尋ねているが、その視線は冷たくコウヅキユウコを見つめている。

「俺はテメエらオルタネイティブ計画に力を貸してやろう。その代わりテメエは、俺の全ての要求に応えて自由にさせる。分かるか？　ただ俺の世話を見るだけで、テメエは自由に振るえるってって訳だ。この俺の力を、マジンガーZの力を！」

ツバと、男が背後に佇む鉄の巨人へ腕を振るう。

「刃向う軍隊を捻り潰し！　数だけ多いBETAどもを一匹残らず全滅させる！　全てを壊し！　殺し！　神にも悪魔にもなれる力を使えるようになるってわけだ！」

所詮は精神異常者の戯言の筈なのに、その叩きつけられるような言葉に夕呼は吞まれる。

黒い魔神が出す迫力に、否と言えない説得力を感じる。

「さあ選べよコウヅキユウコ。俺の提案を受け入れるか？　これが真正正銘最後のチャンスだ。関係が悪化する？　ツバ、へそで茶が沸くな。この力が手に入ればわざわざこちらから言わなくとも、向こうから声をかけてくるようになる。圧倒的力は、ただそれだけで全てが許される。こいつの力を知れば全ての人間が恐れ敬い、そして利用しようと手を伸ばすに決まっている」

「　　いいわ。手を組みましょう」

夕呼は、静かに宣言する。

男の目を見ながら、自分の選択を言葉にして示す。

それは決して男の言葉に呑まれたからではない。そんなものに圧されるほど柔い娘ではないのだ。全ては自分が考え、そして決めたことだ。

確かにこれほどの力はそれだけで価値があるだろう。何せ単機でハイヴを落とすのだ。G弾を使わずにだ。人類史上初めての快拳を成したのである。アメリカも中国もソ連も帝国も、全ての勢力が欲しがらるだろう。それを利用して交渉を運ぶなど容易いに決まっている。

しかし、ここで露呈した危険性はそれ以上にある。何せこれはどこまで行っても個人で振るわれる力なのだ。

分解も出来ず、無力化のための工作も解析のための調査も出来ないマジンガーZ。その力はこの目の前の男だけが使える。しかもその上、当人は精神異常者で明らかに危険な行動原理を持っているのだ。その男の機嫌次第で人に向けられる暴力の存在など、人類社会は決して容認しない。

飯の話、夕呼がこの男の不興を買えばただそれだけで終わりなのだ。マジンガーZという対抗できない力によって夕呼は殺され、オルタネイティブ計画は終了する。

これではどれだけ価値があろうが、使える筈がない。リスクの管理は計画遂行の初歩だ。

しかし、ならば何故この男を組むことを夕呼は選択したのか？
それは選択の余地がないからだ。

男の行動原理を知っている夕呼からしてみれば、断った場合の未来が目に見えて分かった。

アイツはきつと口で残念だと言いながら怒りを表し、マジンガーZの力を使って横浜基地を灰塵に帰し、そしてそれから何事もなか

ったかのように別の国へ向かって同様の交渉を持ちに行くだろう。つまり、夕呼に許された行動はイエスという以外になかった。

そして加えて、また一つの問題があることを夕呼は予想していた。予想外にもこの男がハイヴを落とすとしたがゆえに生じる、ある一つの問題の存在を。

その問題を解決するためには、今夕呼の手元には圧倒的に力が不足していた。今後を乗り切るために、夕呼は今この時、熱烈な力を欲していたのだ。

だから選んだのだ。この男の提案を飲むことを。危険だと分かり切っていたにもかかわらず、その猛毒を飲み干したのだ。

毒を食らわば皿まで。

夕呼はまさしく、真の意味で決断していたのだ。男が持ちこんだチャチな選択などより、遥かに重い選択を

そうとは知らず、男は笑いながら手を叩き言う。

「それじゃこれで契約成立ってことだな。オーケーオーケー、賢い選択だよコウツキコウコさん。ようやく馬鹿なアンタの頭も学習できるようになったみたいだ。それじゃ早速俺の言うことを聞いてもらおうか。とりあえずは風呂付きの部屋と飯を用意しとけよ。もちろん、最上級のな？ 疲れたから俺は寝させてもらおうわ。途中で起こすなよ。そんなときには適当に最初にあつた奴を殺すからな」

「待ちなさいよ」

「あア？」

好き勝手に言いながら、男が夕呼の隣を通り過ぎようとしたのを

呼び止める。

威嚇するように夕呼に視線をやる男へ、色々と言いたいことはあるがとりあえず、彼女はあることについて尋ねる。

「アンタ、名前はなんていうのよ？ いい加減そろそろ明かしてくれないかしら」

その夕呼の言葉に、キョトンとした顔を浮かべて男は固まる。全く予想だにできなかった問いかけだったらしく、驚いたらしい。

「名前、名前ねえ……さて、どうすつか。何か今更本名を使うのも気分が乗らないしなあ」

そのまま腕を組み、うんうんと夕呼を無視して悩む。

やがて悩んだ末にマジンガーZを見た男は、ツパと顔を閃かせて身体を起こした。

「決めたぜ、俺の名前を」

「あ、そう。それで、アンタが捻りだした名前は何なのかしら？」

興味なさそうな風で聞く夕呼に、男は自信満々に答えた。

「ゼット。俺の名はゼットだ。今後は俺をそう呼びな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3106y/>

バイオレンス“Z.O.G”;

2011年11月10日03時16分発行